# 英雄譚―名も亡き墓標―

アマネ・リィラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英雄譚―名も亡き墓標―

【Ｎコード】
Ｎ９９５０Ｚ

【作者名】
アマネ・リィラ

【あらすじ】
とある極東の島国で起こったクーデター事件。それを引き金とし、世界は大戦へと歩を進めた。
世界中を巻き込んだ戦争。その中では多くの命が失われ、哀しみを生み、絶望を生んだ。
その結果として、シベリア連邦――その国は、敗戦した。それにより、敗北したシベリア連邦は欧州連合による統治という名目の支配を受けることとなる。
かつての繁栄から一転、灰色の空に閉ざされた暗雲とした国となっ

てしまったシベリア連邦。誰もが俯くその支配が始まってから、二年の月日が経っていた。
その最中、人々の希望となった存在がある。
義賊集団――《氷狼》。
苦しむ人々のため、統治軍に抗う義賊集団だ。
そこに所属する一人の青年……護・アストラーデ。彼は、戦時下で交わした小さな約束のために戦い抜いていく。
これは……世界の歴史に刻まれる、長い長い戦いを紡ぐ物語。

掲げたものは、約束。
懸けたものは、命。

英雄とは、誰のために生まれるのか。
何のために存在するのか。
ただ、約束を交わした二人の男女は、その命を懸けて戦い抜く。
「あの日掴めなかった手を、今度こそ俺は、掴んでみせる！！」

# プロローグ

静かな夜だった。敵国の軍隊に囲まれているのが、まるで嘘だと感じる程に。

「……わたしたち、どう、なるのかな……？」

不意に、隣から声が聞こえた。そうだな、と、青年は呟く。

「歴史的に見ても、首都を包囲されてから盛り返したなんてふざけた事実はない。……まあ、敗戦だろうな」

敗戦――その言葉を受け、隣の少女は固まったようだった。青年は、ふん、と鼻を鳴らす。

「そもそも、無理があったんだよ。大日本帝国と合衆国アメリカだぞ？　勝てるわけがねぇ。ＥＵも向こうについちまったしな」

忌々しげに吐き捨てる。本当に、この国の上層部はどうかしている。

勝てるはずがない戦争を、どうして、こんなことになるまで――……

「――――ッ」

聞こえたのは吐息だった。見ると、青年の隣で少女が肩を抱き、震えている。

大丈夫か――出かかった言葉を、青年は呑み込んだ。

……大丈夫なわけがない。

今、自分たちは戦争をしていて、敗北を目の前にしている。そして、負けるにしても戦わなければならない。その結果、死ぬことさえあり得る。

それがどういう意味を持つのか……それに対する詳しい説明は、必要ないだろう。

無意味に、殺される。

ただ、それれだけのことだ。

敗北が決められた戦いで、青年たちは戦うことを強要されている。希望さえないままに。

どれほど、理不尽だというのか。

……理不尽。浮かんだその言葉に、青年は唇を噛み締めた。

――そして。

「――大丈夫だ」

青年は、きっぱりと。

断言するように、先程呑み込んだ言葉を、今度こそ紡いだ。

「死なせない。死なせてたまるか」

それがどんな感情から発せられた言葉だったのか、青年にはわからない。

ただ、彼は。

少女に、理不尽に屈して欲しくなかった。

「絶対に、死なせやしない。だから、さ、もっと――そうだな、楽しいこと、考えよう」
「楽しい、こと？」
「ああ。……戦争が終わったら、何がしたい？」

問いかけに対し少女は目を伏せ、少し悩む。そして、それなら、と口を開いた。

「色々な所へ行きたい。わたし、この国しか……ううん、この街しか知らないから」
「いいな、それ。俺も一緒に行っていいか？」
「もちろん」

少女は微笑む。人付き合いの苦手な青年と、人見知りして引っ込み思案な少女。
互いに人と距離を取ってしまう性格だからこそ打ち解けられた二人は、そうして、約束を交わした。

「平和になったら、いいね」
「ああ。本当にな」

青年は呟く。こんなくだらない争いなどすぐに終わって、平和になればどれだけいいだろうか。
隣にいる少女など、銃を握るよりも花を愛でているほうが余程似合うだろうに。

青年は、微笑みと共に問いかける。

「平和になったら、どこへ行きたい？」
「そうだね……えっと、じゃあ――」

微笑み。それと共に、少女が言葉を紡ごうとした瞬間。

――全てを掻き消すような警報が、響き渡った。

少女の、未来を望むための言葉は。

無情にも、打ち砕かれる。

『敵襲！！　敵襲――ッ！！』

叫び声。青年と少女は、ほとんど同時に外を見た。

目に映ったのは、紅蓮。

人の形をしながら、人に非ざる鋼鉄の体を持つ巨体。

古代遺産――？神将騎？

「――――ッ！？」

青年が叫ぶ。同時、二人が立つ足場が大きく揺れた。

視界が揺れる。その中で、青年は見た。敵の神将騎が持つ巨大な銃より放たれた一撃が、城壁を粉砕しているのを。

傾く足場。青年は、反射的に手を伸ばす。

怯えた様子の少女へ。

ただ、手を――……

あの日、届かなかった手が。
届けられなかった手が。
世界に抗う、理由となった。

## プロローグ（後書き）

というわけで、お待たせしましたプロローグです。
続いての第一話もお楽しみいただけると幸いです。

## 第一話　氷狼―フェンリル―

仰向けに倒れた状態から、空を見上げた。灰色の空。降り出した雪が、視界をまばらに白く染め上げていく。
聞こえてくるのは、勝鬨を上げる声。負けたのだな、と、他人事のように思った。

手を伸ばす。
何かを掴もうとするかのように。
青年は――手を伸ばした。

しかし、その手は何も掴めない。
ただただ、冷たい空気に触れるだけ。

城壁の上から落下したために、体は負傷していた。足の感覚がない。くっついてはいるようだが、負傷しているらしい。上手く動かない。
だが、そんなことよりも。

伸ばした手が掴めなかったもの。
理不尽に奪い去られたもの。

それが、何よりも――……

「おい、見ろよ」

声が聞こえた。視線を巡らせると、そこにいたのは敵国の――EU軍の兵士たち。彼らは笑みを浮かべ、こちらを見ている。

「生き残りだぜ。殺しとくか？」
「そーだな、女だったら良かったんだけどな」
「男なんていらねぇしな」

そこにいた三人の兵士は好き勝手にそんなことを口にすると、銃口をこちらへと向けてきた。
銃口。見慣れたものだ。青年は、ほっ、と息を漏らし。

――銃声と鮮血が、積もり始めた雪の大地を彩った。

地面に死体が転がる。正確に額が撃ち抜かれて転がっているそれらの傍へと青年は歩み寄る。その表情は、人殺しを何とも思っていない者のそれだった。
戦争という現実が。
僅か、齢十八という若さの青年を人殺しへと変えてしまっていた。

「……生き延びるんだ」

兵たちから装備を奪い、外套を身に纏うと、青年は呟いた。
銃を杖に。敵国の軍隊が勝利に沸く、彼にとっての故郷に背を向けて。

「必ず――俺は」

理不尽に対する怒りと。
自身の不甲斐なさに対する怒りを携えて。

氷の世界の狼、その戦いが始まった。

◇　◇　◇

電子音が鳴り響く。コックピット内に響き渡るその音を耳にし、青年――護（まもる）・アストラーデはゆっくりと目を開けた。そうしてから彼は、コックピット内に備え付けられた無線を操作し、外部に繋ぐ。

「――こちら、一番」

意識を起こしながらそう言葉を紡ぐと、ザザッ、というノイズが耳に届いた。次いで、相手の声が聞こえる。

『こちら二番。ゆっくりと休めたか？』

「正直、万全とはいかねぇけどな」

『それは、お互い様だ』

苦笑のようなものが聞こえた。だが、その通りだ。この状況下、辛くない者などいない。全員が無理を押しているのだ。

それを内心で確認し、護は言葉を作った。

「……今回の作戦が成功すれば状況がかなり改善されるんだろ？」

『俺たちの、じゃなくて国民の、って条件が付くがな。まあ、いよいよ相手もこっちを無視できなくなるはずだ』

真剣な声色。護は、そうか、と頷いた。

この戦いを始めてから一年以上……随分、遠いところまで来たように思う。

自身が駆る相棒と共に、仲間と共に、よく、ここまで。

「本当に、随分遠くまで来たもんだよな」
『確かにな。だが、いきなりどうした？　らしくない』
「……夢を見た」

護は、呟くように、そう応じた。

「二年前の夢だ。俺が戦うと決めた日を、夢に見た」

護は、真っ黒な視界に向けて手を伸ばした。
――ゆっくりと、握り締める。だが、やはりその手は何一つとして掴めない。

『そうか。……だが、思い出に浸るのも程々にしておけ。いつもの通り、お前が失敗すれば俺たちは全滅だ。わかっているな？』
「当たり前だろ。――安心しろ、レオン。俺は負けねぇ」

相手の名を呼ぶ。すると、レオン、と護が呼んだ相手が苦笑を漏らす気配を感じた。

『名を呼ぶな。番号呼称の意味がないだろう？』
「っと、悪ぃ」
『いや、構わん。――それでは、な。十分後に作戦開始だ。お互い、最善の結果を』
「ああ。死ぬなよ？」
『お前もな』

ザザッ、というノイズが走り、通信が途絶える。護は一度目を閉じると、大きく息を吐いた。
戦いが始まる。伸ばした手で、今度こそ掴み取るための戦いが。

「まだ、そこにいんのか？」
浮かぶのは、少女の微笑。
約束を交わし、しかし、それが果たせなかった相手。
あの少女と、再び会うために。
「……行くか、〈フェンリル〉」
ヴン、という音と共に、コックピット内の空気が僅かに揺れた。
黒一色だった世界に明かりが灯り、護の姿が浮かび上がる。
漆黒の髪と、碧眼。シベリア人としての特徴より、もう一つの血のほうの面影が濃い容姿。
鋭い光を宿すその瞳を、護は巡らせる。
「エネルギー残量、７６％……まあ、こんなもんだろ。起動予測時間は一時間と少し……戦闘なら半分か。けど、そんだけ動けんなら十分だ」
そして、彼は時を待つ。
作戦開始のその時を。
――そして。
その時が、訪れる。
響く爆発音。護は両の手に力を込め、大きく吠えた。
「――行動開始だ！！　行くぞッ！！」

◇　◇　◇

カルリーネ・シュトレンは、苛立ちを抑えるために深夜、外へ出ていた。彼女は、ふん、と吐き捨てるように鼻を鳴らすと、忌々しげに呟いた。

「何が？奏者？だ……ただのパーツ風情が、偉そうに」

統治軍――敗戦国であるシベリア連邦の治安維持のためにＥＵより派遣された軍隊の、茶色を基調とした制服を身に纏う彼女は、額に皺を寄せ、基地の中心にある司令部を睨み付けるように見据えた。

そこには、彼女が最も嫌うタイプの人種――大した実力もないくせに、『？奏者？だから』という理由だけで踏ん反り返っている人間がいる。

確かにあの男は二年前の世界大戦で活躍したのだろうが、それは？神将騎？という現代最強の兵器にして、黎明の時代に生み出された古代遺産の力があってこそだ。あの男自体は、ただただ選ばれただけに過ぎない。

――だというのに。

「私の忠告を、無能の身で笑って退けるなど……愚かな」

言って、カルリーネは空を見上げた。漆黒の空。星どころか、月さえも見えない。

大戦の影響だと、カルリーネは思った。ここ二年、シベリアの空が晴天を見せたことがない。元々からして厳しい気候の地域であったが、やはり、ここで行われた戦いが効いているのだろう。

――世界大戦。
ここ二年で、かつての戦争のことをそう呼称するようになった。極東の島国――閉鎖された国で起こったクーデターをきっかけに、あらゆる世界を巻き込んだ大戦争だ。
カルリーネの祖国、『千年ドイツ大帝国』も戦争に巻き込まれた。彼女は伝統ある貴族の責務として兵を率いて参戦し、同時期に欧州連合ヨーロピアン・ユニオン、通称ＥＵの兵士として戦い、そしてＥＵはシベリア連邦に勝利した。
無論、その勝利自体はＥＵのみのものではなかったが、様々な事情が絡んだ結果、シベリア連邦はＥＵ軍――改め、統治軍が治安維持という名目の下、暫定統治を行っている。

……もっとも、植民地支配に近いがな……。

小さく、確認の意味も込めてカルリーネは呟いた。だが、それは当然だ。シベリアは敗戦国であり、ＥＵは戦勝国だ。敗戦国の末路は、歴史が示している。

「――だが、それに従わない者もいる。それを何故、理解しない？」

再び、彼女は司令部を睨み付けた。だが、それで何かが変わるわけでもない。カルリーネはふう、と息を吐くと、通信機を取り出した。そして、彼女の部下へと電話をかけようとする前に――

「貴様、そこで何をしている？」

不意にカルリーネの視線が、二つの人影を捉えた。
軍服を着ておらず、作業衣を着た男女だ。二人はびくりと体を震わせると、こちらへと敬礼を返してきた。そして、男の方が言葉を紡ぐ。

「はっ、戦車の整備を行いに」
「整備？　その割には、何も持っていないようだが」
「はっ、足りないパーツがありましたので、今からそれを倉庫へ取りに行く途中であります」

リストです、と男がこちらに歩いてきて手に持っていたバインダーを手渡す。女の方はこちらへ敬礼をしたままだ。帽子のせいで顔が伺えないが、まあ、カルリーネに興味はない。
カルリーネはリストを確認すると、ふむ、と頷いた。特におかしなところはない。整備の前に用意していなかったのは整備班の不備であろうが、それは別に罰するほどのことではない。そもそも、彼女はこの基地の担当ではないのだ。罰する道理もない。

「了解した。すまない、呼び止めた」
「いえ。では、失礼します」

敬礼。それと共に、男は去っていく。カルリーネはその背を見送ってから、改めて通信機を手に取った。ザザッ、というノイズが走った後、通信が繋がる。

「――ヤナギ。車の用意を。帰還する」
『任務は済んだのですか？』

無線から返ってきたのは問いかけだった。カルリーネは、首を左右に振る。

「忠告はしたが、受け入れなかった」
『成程、ですが、良いので？　別に今夜くらいはここで過ごしても』
「いや。ここが碌な対策も取らないことがわかった以上、すぐに上

へ進言する必要がある。同時に、首都の防備を固めなければならない」

『……了解』

頷きが伝わってくる。カルリーネは歩き出した。長居をする意味はない。特に、ここへは大した人員も連れてきていないのだ。自分本来の居場所へ急ぐべきだろう。

そうして、ドイツの貴族軍人が立ち去ってからしばらく後。

この基地が――戦場になった。

◇　◇　◇

最初に異変に気付いたのは、巡回中の警備兵だった。巡回といっても、まず襲撃など考える必要のない基地の見回りである。士気は低い。外壁から外への監視ならばもう少しやる気があるのだろうが、まず問題など起きない内部の見回りなど、面倒以外の何物でもない。

「……あれ、まだやってんのか、整備の奴ら」

普通なら見回りというのは二人一組で動くのが通例なのだが、ここではそれさえも守られていない。手間を減らす、という名目で一人ずつで巡回しているのだ。

その最中、その兵士は灯りが点いている施設を見上げた。そこは戦車などが格納されている場所で、整備の者たちが本領を発揮する場所だ。

遅くまでご苦労なことで、と兵士は思いながらも、その建物へ近付いていく。時間が時間である以上、一応確認をしなければならな

い。知り合いもいるし。
だから、と兵士は軽い気持ちで扉を開け、中に入った。大扉ではなく、人の出入り用の扉だ。
「お疲れ――」
さん、という言葉は、告げることができなかった。
兵士が目にしたのは――朱。
――整備班の者たちが、床に血をぶちまけ、死んでいる姿だった。
「あ……」
思考が、一瞬でフリーズする。理解の追い付かない事実が、思考を止めた。しかし、それとは別に、高速で動く思考もまた、存在する。
だが、それは。
思考の停止を、ただただ加速させるだけのものでもある。
――死。
その一文字しか、感じられない。
「ひ、あっ……？」
悲鳴が漏れたのは、僥倖か、それとも、否か。
いずれにせよ、兵士は、そこで思考を取り戻す。
「――――ッ！！」

――だが、悲鳴を上げることは許されなかった。

兵士の体が、ゆっくりと傾く。同時に、その首から、凄まじい量の血が噴き出した。

その背後、一人の男が立っている。灰色の瞳と金髪を要する、壮年の男だ。年の頃は３０半ばといったところだろう。

「……さて」

手にナイフを持ち、壮絶なまでの量の返り血を浴びたその男は。

「レオンの指示通り、狼煙を上げようか」

惨劇を生み出した男は、そう言うと。

その視線を、目の前で沈黙する一台の戦車へと向ける。

――直後、格納庫の扉が、轟音と共に吹き飛んだ。

◇　◇　◇

響き渡る轟音に、ここ、エスリア基地司令――ラット・ケインズ中佐は身を震わせた。何事だ、と声を荒げる。

「一体何の騒ぎだ！？」

「――報告します！！」

叫ぶとほぼ同時に、ラットの私室に殴り込むように彼の副官が入

ってきた。普段なら不敬にあたる行為だが、今は緊急事態だ。いちいち咎める意味はない。
副官は手元の資料を見ながら、切羽詰まった表情で告げる。
「襲撃です！！　一番格納庫にて爆発！！　戦車を奪われました！！　同時に、二番、三番格納庫でも爆発を確認！！　こちらは内部に用意されていた兵器を全て破壊された模様！！」
報告に、ラットはギリッ、と歯軋りをした。素早く軍服を羽織ると、彼は怒鳴るように副官へと問いかける。
「下手人は！？」
「確定情報ではありませんが……おそらく、《氷狼（フェンリル）》かと……」
どことなく、戸惑いを含んだ言葉。ラットは、より一層強く歯を食い縛った。
（あの貴族の小娘の言う通りだっただと……！？）
思い出すのは、今朝方、伝令として部下を一人連れてここへ来た女性士官だ。彼女はこちらを見るなり、形だけの敬意を払ってこう告げたのだ。
――《氷狼》という義賊集団に気を付けろ、と。
何を馬鹿な、と、ラットもその副官も笑った。《氷狼》――とある事情から確かに厄介な集団だが、ここにはそれを退けるだけの戦力は整っている。更に、前回の奴らの行動は、ここから随分と離れた場所だった。故に、その忠告を笑って受け流したのだが――
「忌々しい……戦況は？」
「はっ、兵たちを向かわせていますが、何分、向こうはこちらの戦

車を奪っております。破壊には相応の被害が出るかと」

副官が頷く。ラットは頷いた。戦車は、？神将騎？を除けば、現代の人類が辿り着いた技術の結晶だ。その力は何よりも、耐久力にある。歩兵用の武器では、使い捨てのランチャーでようやく傷がつけられるくらいだ。

そして、こちらの戦車は行動不能にされているという。状況は、随分と切迫している。

――故に、ラットは一つの決断を下した。

「〈ゴゥレム〉を用意しろ。――私が出る」

はっ、と、彼の副官が応じ、駆け出していく。それを見送ってから、ラットは、自室の外で瞬く光を睨み付けるように凝視した。

そして、吐き捨てるように口にする。

「賊が。見せてやろう、大戦時代、エースと呼ばれたこの私の力を……！」

◇　◇　◇

戦車の操縦をしながら、レイド・ノーティスは舌打ちを零した。彼が乗った戦車は、ＥＵ製のもの。大戦時代に彼が乗っていたシベリア製のものとは無論、勝手が違うとは思っていたが――

「……対人用の兵器はないのか！！」

少し長めの金色の髪を揺らしながら、引き金を引く。吐き出され

るのは、砲弾。
圧倒的な威力の一撃が、敵の部隊が身を隠している防壁を打ち砕いた。土嚢で造られた即席の壁など、正直、敵ではない。それごと吹き飛ばせる。しかし。

「今だ、放て――ッ！！」
「ッ、ちいッ！！」

舌打ちを零す。それと同時に、車体を凄まじい衝撃が襲った。ランチャーの一撃だ。
戦車の一撃は、確かに強い。だが、今は砲撃よりも対人用の榴弾などが必要な場面だ。一発一発の威力が大きい分、通常の砲撃は次弾装填までに時間がかかり、更に、一撃が大き過ぎるために効率が悪い。

車体が揺れる。レイドは、このっ、と、全力で戦車の軌道を変えた。

「吹き飛べ！！」

同時、砲撃を行う。その衝撃を利用し、大きく後退。建物の陰に姿を隠す。いくら戦車の装甲が頑丈とて、何発も喰らえば吹き飛ぶ。更に言えば、砲門がやられればこちらの詰みだ。
どうするか、と、一度大きく息を吐いたレイドが呟く。それを待っていたかのように、レイドが胸元に装備していた無線から通信が届いた。

『こちら二番、首尾はどうですか？』
「見ての通りだ、坊主。――どうする？」
『――作戦続行です』

返ってきた返答は、とても簡単なものだった。レイドは、へっ、と言葉を漏らす。

「そっちは大丈夫なのかい？」

『……まあ、空腹で今にも倒れそうですが、概ね大丈夫ですよ。四番と共に、今は馬鹿を待っています』

「馬鹿、ね」

レイドは苦笑を漏らした。馬鹿。自分たち、《氷狼》の中で一番真っ直ぐで、同時に、だからこそ危なっかしい男。彼は、この作戦をどう思うのか。

（仕方ない、で納得するようなタマでもないしな）

実際、この作戦についても真っ先に反対したのはあの男だった。だが、少数戦力である自分たちが、基地一つを襲撃しようというのだ。当然、相応の覚悟を決める必要がある。

その覚悟の一つが、死ぬ覚悟だ。

ギリギリの綱渡り。それをしなければ、何一つことを為すことはできない。それを、レイドも通信の相手も理解している。馬鹿も理解はしているが、納得はしていない。

だが、まあ。

それでいいのだろうと、レイドは思うのだ。

――あの日、雨の中で。

ボロボロの体で、他人に手を差し出すような余裕などない中で。

それでも、手を差し出すような馬鹿だから。

レイドは微笑を漏らしつつ、呟く。

「まあ、いいさ。……二番よ、この後は？」
『『あれ』が出ると同時に、門を破ってください。同時に撤退です。後詰めは、馬鹿が』
「了解だ」

頷く。すると、不意に銃撃が止んだ。
何だ、と、レイドが眉をひそめる。だが、答えはすぐに来た。
灰色の瞳が映す視界の先、そこに、答えがある。

――全長、四メートル程の巨人が、その巨体に相応しい巨大なアサルトライフルを構え、立っていた。

◇　◇　◇

丸い、と、レイドはその機体を見た瞬間、そんな印象を抱いた。
関節部が丸く、両肩も球体型に膨らんでいる。両掌と、地面を踏み締める足こそ人のそれに近いが、顔までもが球体のそれは、どことなく鈍重な印象を受ける。
だが、レイドは油断など一切、していなかった。額から一筋の汗を流しつつ、舌打ちを零す。
「出やがったな……？神将騎？」
？神将騎？――かつて、黎明の時代。人が辿り着いたという究極の力とされるそれは、古代遺産であると同時に、現代最強の兵器であ

る。
初めて発見されたのがいつかはわかっていない。だが、数十年の前より見つかってきたそれらは、装甲こそ劣化していたものの、兵器としては実働した。曰く、史上初めて？神将騎？に乗った男は、こう口にしたらしい。

――？まるで、私たちを待っていたかのようだ？

この後、軍事に利用できると判断された？神将騎？は危険視されるようになり、男は暗殺される。
そして、そのほぼ直後から、世界各地の遺跡から一～数十という単位で？神将騎？が発見されるようになった。しかし、そこへ問題が生じる。？神将騎？は、誰にでも扱えるものではなかったのだ。？奏者？と呼ばれる者がいる。統計的な確立にして、一万人に一人。
それが――？神将騎？を操縦することが許される者だ。どういう基準か、？神将騎？は乗り手を選ぶ。そして選ばれた者こそが？奏者？だ。

現代最強の兵器――それを従える者、？奏者？。
その者たちが戦場を左右するという事実は、覆しようのない事実である。

「――チッ！！」

吐き捨てるように激しい舌打ちを零すと同時、レイドは動いていた。凄まじい音を立て、戦車のキャタピラが動き出す。後方へ全速力で退避しながら、砲撃を放つ。

――轟音。
放たれた砲弾は、直撃のコースだった。だが、敵の？神将騎？は

大きく横へと飛びずさると、容易く躱した。レイドは、これだよ、と、小さく唸る。

「ふざけた機動性だ……！　冗談抜きで次元が違う！」

文字通り、巨大な人が動いているようなものだ。理不尽この上ない。人の挙動を、四メートルオーバーの巨人がこなすというのだから。しかも、鉄の装甲を付けているせいで、簡単に突破できないときた。

これは、本当に――……！

厄介だ、と、レイドが思うと共に、反撃が来た。敵が手に持つアサルトライフル。それが、火を噴く。

――――――――ッ！！

凄まじい音が響き、車体が大きく揺れる。人の銃ならば容易に跳ね返す戦車も、？神将騎？のそれとなるとそう単純にはいかない。そもそもの口径が違うのだ。単純計算で四倍以上。最早その威力は、バズーカのそれに勝るとも劣らないものとなっている。

揺れる車体。音と衝撃、感覚を経験が計算し、答えを伝えてくる。

――装甲が吹き飛ぶ……！！

かもしれない、などという浅はかな希望的観測はなしだ。破られる。戦車の砲撃は、確かに？神将騎？の装甲を吹き飛ばす。しかし、それは当たればの話であり、今の彼には当てることさえ困難である。

故に、レイドは牽制のための一撃を放とうと引き金を引いた。当たらずとも、少しでも相手の動きを止められればと。

だが。

「――――ッ！？」

前方の視界が、一瞬、途絶えた。

視界が白に染まる。体に、凄まじい衝撃が叩き込まれた。何だ、と思うと同時に、レイドは感覚で理解していた。――暴発だ。

おそらく、敵のアサルトライフルの射撃により、砲門が歪んだのだろう。砲撃が暴発したために、戦車の前方部分が吹き飛んだのだ。

くっ、と、無理矢理に目を開き、レイドは前を見た。負傷はあるが、それよりも、今前を見なければ殺される。

「くそ、がっ」

睨み付けるように前を見る。だが、敵はこちらに容赦をする気はないらしい。一切の躊躇もなく、銃口をこちらに向け、引き金を引こうとしている。

くそっ、と、もう一度、レイドが呟いて。

アサルトライフルから、弾丸が放たれた。

――しかし。

その銃弾は、彼には届かない。

銃声と共に、地面を揺らす、何かが着地した音が響いた。

銃弾の着弾の音が響く。しかし、それは穿つ音ではなく、防がれる音。

『――すまねぇ、おっさん。少し遅れた』

外部スピーカーで聞こえてきたのは、そんな声だった。レイドは、はっ、と息を吐く。

「遅いぞ、坊主」

◇　◇　◇

〈ゴゥレム〉のパイロットであり、?奏者?であるラットは、眉をひそめた。彼の視線の先には、一機の?神将騎?がいる。
青で塗装された機体だ。脚部が細く、両腕も標準のものに比べて随分と細い。
全体的に細いフォルムをしたそれは、その頭部をこちらへ向けてきた。右と左、両手にそれぞれ有しているのは、両刃の剣と盾だ。
ラットは、ふん、と鼻を鳴らした。

「〈フェンリル〉――だったか。くだらんな。銃の一つも持たず、盾と剣だけだと？　騎士でも気取るつもりか」

そして、〈ゴゥレム〉が跳ねた。見たところ、相手の武装に銃火器はない。ならば、距離を取って追い詰めればいい。盾があろうと撃ち抜くことは可能だ。
そう思い、後退しながらアサルトライフルの引き金を引く。?神将騎?の刃としては標準のそれであるため、過度な破壊力は求められないが、構いはしない。

「ここをこれほどまでに粉砕した礼を、させてもらうぞ！！」

引き金を引く。引き続ける。対し、〈フェンリル〉は横っ飛びをし、射線から離れた。
逃がすか、と、ラットは銃口の向きを変えていく。そうしながら、

ラットは外部へのスピーカーを開き、吠えるように言葉を紡いだ。
「敗戦国の亡霊が……！　いい加減に認めろ！　貴様らは負けたのだ！　敗北者の末路などそんなものだ！　何故それを理解しない！？」
『――誰が負けたんだよ』
応答が返ってくるとは思わなかったため、ラットは一瞬、虚を突かれた。だが、牽制の銃撃のせいで相手は近付けない。このまま追いつめていけばいずれ詰める、と判断する。
『勝手に始められた戦争で、勝手に負けたと言い渡されて……納得できるわけがねぇだろうが！！』
「納得も何もない！　世界が認めたのだ！　貴様らは負けたとな！！」
『負けてなんかいねぇ！！　俺は今も、こうして戦ってる！！』
吠える声。ラットは、ふん、と鼻を鳴らした。
いくら吠えようが、結局変わりはしない。事実、追い詰められているのは向こう。そして、敗戦したのもだ。
故に、亡霊が、とラットは呟いた。
「ならばここで散れ、亡霊！　亡国の餓狼など、笑い話にもならん！！」
引き金を絞る。そこで、弾丸が尽きた。〈ゴゥレム〉は手慣れた動作で弾倉を交換すると、すぐさま射撃体勢に入る。
破砕音。相手が持つ盾に亀裂が走ったのだ。ラットは、吐き捨てるように言った。

「騎士の真似事か。どこまでも亡霊だな。銃の出現により、騎士の時代も侍の時代も終わったのだよ！」

かつて、騎士と侍という存在が勇名を馳せた時代があった。しかし、鉄砲という存在がそれを否定し、今の時代においては騎士も侍も滅びている。

だというのに、目の前の敵は、盾と剣のみを手に、こちらへ向かってきている。

まるで、騎士のように。

ラットは、舌打ちを零した。騎士――『精霊王国イギリス』の出身である彼にしてみれば、酷く癪に障る存在だ。最早廃止された、崇拝に近い憧れを抱かれる偶像。

戦場で骨身を削るのは自分たちであるというのに、今も尚、騎士という存在が重要視されている。

実に――腹立たしい。

故に。

「消えろ、亡霊！」

ラットが叫び、その銃撃が〈フェンリル〉の盾を砕いていく。

殺った、と思った。確信に近い想い。

――しかし。

「――――！？」

不意に、自身が放っていた銃弾の雨が止んだ。同時、衝撃により、機体が揺れる。

右腕――そこに持っていたアサルトライフルに、〈フェンリル〉が手にしていた剣が突き刺さっていた。

投擲、と理解すると同時、その脚力をフルに使った跳躍が行われる。今の今までずっと堪えていたのか――そう思うほどの、跳躍だった。
蒼き巨人が、距離を縮めてくる。その右手は、まるで獣のそれであるかのように鋭利な爪を持っていた。
『――消えるのは、テメェらだよ』
装甲さえも貫くであろう爪が迫る。死。それを覚悟した瞬間、こんな言葉が聞こえた。
『ここは、あいつの国だ。……テメェの国に、帰りやがれ』
直後、腹部を貫かれた〈ゴゥレム〉が、爆散した。

◇　◇　◇

爆炎が立ち上り、自分たちの基地に唯一存在していた？神将騎？の敗北で混乱している基地の中を、一人の青年が少女と共に歩いていた。来ていた作業衣の前を開け、楽そうな格好になりながら、青年は呟く。
「とりあえず、今回も無事に完了か」
「お疲れ様」
ため息のようなものを零す彼の隣で微笑むのは、一人の少女だ。青年――レオン・ファンは、ああ、と頷く。

「レベッカもよくやってくれた。……礼を言う」
「いいよ、別に。でも、これで良かったんだよね？」

少女……レベッカ・アーノルドは振り返りながらそう言った。レオンは、ああ、と頷く。

「もう、犠牲を出さない方法などと悠長なことを言っていられなくなった。俺たちは少数だ。打てる手はすべて打たなければならない。あの馬鹿も、それは理解しているはずだ」

見上げるのは、まるで血のように右腕から黒い液体をたらし、天を見上げている？神将騎？の姿だ。
人を殺しながらも、それでも、甘いことばかりを口にする男。
約束、と、あの男はまるで自分を奮い立たせるようにいつも呟く。
それがどういったものかはわからない。ただ、願わくば。

「死ぬにしても、生きるにしても。笑っていられれば、いいんだがな」

◇　◇　◇

護は、大きく息を吐いた。そうしてから、掌を見つめる。
……震えている。
戦闘中には、欠片も見せなかった反応だ。人を殺すこと。今更、それに怯えているというのか。

「……馬鹿野郎」

護は、吐息のように呟いた。同時に〈フェンリル〉を操作し、来た時に破壊した門を通って外へ出る。そうしながら、彼は呟いた。

「なぁ、アリス……俺は――……」

力なく紡がれた言葉は。

最後まで紡がれることはなく、宙に溶けて消え失せた。

――交わした約束は、まだ、果たせていない。

## 第一話　氷狼―フェンリル―（後書き）

というわけで、連続投稿です。
今回登場したキャラクターの一人、カルリーネ・シュトレンというキャラクターは、アヴェンジャー先生に考えていただきました。
口調などは弄っていますが、他はほとんどそのままです。
アヴェンジャー先生、ありがとうございます。

さてさて、始まりましたこの連載。第五話までは文字通りかっ飛ばして全速力に突き進みます。それが序幕となりますので。
今後、他の先生たちに考えて頂いたキャラクターも随時出していきます。

では、今回はここまでで。

感想くださるとうれしいです。

ではでは～♪

## 第二話　再会は、幸か不幸か

シベリア連邦首都、モスクワ。
かつてはシベリアの王族が住み、極寒の地でありながらも賑わっていた都市だ。
しかし、二年前――シベリア連邦の敗戦の際、最後の決戦の場となったこの都市はその後、統治軍の本部が置かれ、活気と呼べるものがほとんど消えていた。
街の中心部にいるのは、精霊王国イギリスの軍隊を中心とした統治軍の者たちや、他国の人間。
砕かれた外壁の側、身を寄せ合うようにして『スラム』という場所で暮らすのは、シベリア人たち。
この二つの明確な格差。それが、全ての現状を物語っていた。

◇　◇　◇

「……相変わらず、ここは変わらねぇな」

スラム街――シベリア連邦の人間でありながら、首都を追われた者たち。敗戦国の人間という弱い立場に追いやられながらも、身を寄せ合って生きる彼らの居場所だ。
立ち並ぶ家屋のうち、一軒の家屋から姿を現した護は、吐息のような小さな声で呟いた。
かつて、ここで過ごした日々。戦争が始まる前も、始まった後も。
ずっと、ここは――……

「生まれ故郷に帰ってきて、感慨深いか？」
「……レオン」

振り返った先にいるのは、金髪の青年だった。レオン・ファン。二年前に出会い、あまりにも無謀な戦いを敢行しようとしていた護に道を付けてくれた男だ。
そのレオンは、まあ、と前置きを付けてから言葉を続ける。

「この状況を見て感慨深いと思うようなら、精神がどうかしている。……怒りか、護」
「……うるせぇ」
「俺に八つ当たりをされても困る」

レオンは、ふう、と息を吐いた。

「とりあえず、ここで事を起こすつもりはない。早まるなよ、護」
「わかってる」
「なら、いい」

言って、レオンは護に背を向けて歩き出そうとする。そのレオンに、護が問いかけた。

「どこへ行く気だ？」
「ちょっとな。ここで落ち合う予定の奴から連絡がない。調べてくる」
「……俺にできることはあるか？」
「今のところは、とりあえず休んでおけ」

笑いながら言うレオンに対し、護は頷く。レオンはこちらへ背を向けたままに手を振ると、そのまま歩き出した。対し、護は逆方向

へ歩き出す。
瞬間。

「あーっ、マモル兄ちゃんだ！！」
「ホントだ！　お兄ちゃんだ！！」
「お兄ちゃん、お帰りなさい！！」

言葉と共に、護の視線の先にいた子供たちが飛びついてきた。皆、年の頃は十を下回るくらいだ。

「おうっ！？」

いきなり抱きつかれ――というか、腹部に打撃を受けた――衝撃で護はよろける。だが耐えた。しかし。

「わーい♪」

追加の波状攻撃が更に入り、結果、護は地面に倒れる。どさっ、という音と共に、背中から雪の積もった地面へと。
……物凄く冷たかった。

「いつつ……おいコラ、人に飛びつくんじゃねぇ。危ねーだろうが」
「遊ぼう！！」
「遊ぼうよ！！」
「遊んで！！」
「聞いちゃいねぇ……」

体に抱きついた状態で、口々に言う子供たち。護は深くため息を吐いた。
初めてここに入った時、子供たちは愚かここにいる全員に護は警

戒された。ハーフとはいえ、彼の身体的な特徴はシベリア人のそれではない。外国の出身である父親のそれに近いのだ。
そう――大日本帝国。世界最強国に住む人間のそれに。

「お兄ちゃん、今度はいつまでここにいれるの？」

無邪気な声。護は。そーだな、と呟いた。
紆余曲折あり、今、護はここで受け入れられている。それについては色々と思うことがあるが、まあ、今は置いておこうと思う。

「どれくらいいられるかは、レオン次第だな。俺たちの方針はあいつが決めてるから」

身を起こし、立ち上がると、護は子供たちと同じ目線になるように膝を折りながら言う。男の子の一人が、えー、と声を漏らした。

「マモルお兄ちゃんがリーダーなんじゃないの？」
「俺がリーダー？　あー、それはない。うん。ねぇな。リーダーはレオンだよ」
「でも、レオンお兄ちゃんはマモルお兄ちゃんが『えーす』だって言ってたよ？」
「そんなこと言ってたのか、あいつ」

護は苦笑を零す。レオン・ファン。護たち義賊集団……たった五人しかいない《氷狼》という一団のリーダーは間違いなくレオンだ。あの男が作戦を立案し、あの男も含めたメンバー全員で事に当たる。
その中で、？奏者？でもあり、唯一？神将騎？を扱える護を主軸に置いた作戦が立てられるのはいつものことだ。だが、だからといってエースというわけではない。

「俺はエースじゃねー。そんな大層なもんじゃないよ」
「でも、マモルお兄ちゃんは強いんでしょ？」
どうだろうな、という言葉が口から出そうになった。だが、こちらを見ている子供たちの目を見、護はその言葉を呑み込む。
代わりに。
「少なくとも、お前たちを守れるくらいの力はあるつもりだ」
頭を撫でつつ、そう言った。子供たちが、うん、と嬉しそうに頷く。
「とりあえず、俺は今から行くところがあるから、そのあとで遊んでやる。いいな？」
「え～？」
「えー、じゃねぇ。……そんなに遊んでほしいなら、レベッカにでも頼んどけ。じゃあな」
言って、護は子供たちに背を向ける。そうしてから、白い吐息と共に空を見上げた。
「灰色の空、か」
それは、あの日。
戦うと決めた日と、同じ色をしていた。

◇　◇　◇

スラムの片隅にある廃屋。明かりのついていないその部屋に、三つの影があった。そのうち、一つの影が言葉を紡ぐ。

「……それで、レオン。あいつとは連絡が取れたか？」

声を上げたのは、レイド・ノーティスだ。《氷狼》の中では最も年長であると同時に経験も豊富な彼は、視線の先にいる青年――レオン・ファンに問いかける。レオンは頷いた。

「合流場所に行ったが、姿がなかった。痕跡の一つもない」

「失踪したか？」

「……いや、もっと最悪の展開かもしれない」

言って、レオンは視線を今まで沈黙していた三人目に向けた。そこに立っているのは、足下に大きなバックパックを降ろした状態の女性だ。左目に眼帯を着け、濃紺の髪を後ろで結った女性は、促されるように言葉を紡ぐ。

「ここ数日、統治軍に動きがあるね。本国の方からの増援って話だ。だけど、その増援のほとんどは首都以外へ派遣されてるらしいから、ここの戦力は前とそんなに変わらないだろうね」

「……レオン、この女は？」

「アタシかい？　そうだね、ただの通りすがりの旅人だよ」

女性はそう言うと、微笑を漏らした。レオンは肩を竦め、言葉を紡ぐ。

「アルビナさんだ。以前世話になって以来、時々こうして情報をもらっている。世界各地を旅してるおかげで、色々と情報に詳しいから助けられてる」

「それはお互い様。アタシとしても、この国を自由に動くのに事情を知ってる奴がいた方が助かるからね」

アルビナ、という女性は微笑を崩さないままにそう言葉を続ける。レオンは、話を戻そう、と言葉を紡いだ。

「統治軍に動きがあるのは確かだ。その確認のために首都に戻ってきたが、以前来た時とはかなり変わっている」

「変わってる？」

「ああ。……空気が重い。張り詰めている、と言った方がいいかもしれないな。だが、心当たりがない。一体、ここで何が起こっている？」

わからない、と、レオンは呟いた。

「本国からの増援自体は別におかしくはない。俺たちみたいなのがいるというのが現状だからな。だが、アルビナさんの話と俺が調べた情報で出てきた増援の規模が、明らかに道理に合わない」

「道理に合わないってのは？」

「規模が大き過ぎるさね」

言いつつ、アルビナは紙片を取り出し、机の上に広げた。同時に、レオンが蝋燭に火を点ける。スラムに電灯などという気の利いたものは存在しない。

その紙片の情報を見つめながら、レオンは疑問符を浮かべた。

「二個連隊……新しい将軍が来るという話は前々からあったが、この規模はいくらなんでも大き過ぎる。何故、今更この国にこれだけの規模の軍隊を派遣する？」

「反抗を恐れてるとかじゃないのか？」

「――俺たち以外、戦える奴なんていないのに？」

レオンの言葉に、レイドは口をつぐんだ。そう、この国には現状、レオンたち《氷狼》以外に戦っている者たちはいない。いや、正確には戦える者がいないのだ。何故なら。

「……シベリア軍の軍人たちは収容所送り。そうでなくても、十五歳以上の男は強制労働。俺たちは運よく逃れたが、そうでない者たちは今も苦しんでいる」

そう、元軍人は終戦後、各地に作られた収容所へと送り込まれた。また、十五歳以上の所謂一般人も、各地で強制労働に従事させられている。

これは叛乱の抑制だ。スラムに女子供と老人しかいないのもそれが理由である。この国には、戦える力がないのだ。

「確かに、俺たちは神将騎を一機持っているし、護という奏者もいる。だが、それだけだ。それだけの一団を相手に国という組織が連隊を派遣するわけがない」

「治安維持の強化は？」

「元々反抗する基盤を砕かれている。俺たち以外、向こうにとっての問題はないのが現状だ」

反抗しようにも、そのための力がないのだ。クーデター、叛乱、革命……その全ての裏には、武力という確かな力が存在している。しかし、この国にはそれを所持することさえも許されていない。

そうだな、と、レオンは目を伏せ、言葉を紡いだ。

「あるいは、向こうに問題が発生したか」

「問題？」

「ああ。……噂話の類と思っていたが、現実味を帯びてきたな」
噂話、と、レオンはもう一度呟いた。それを引き受けるようにアルビナが言葉を紡ぐ。
「反乱軍……それも、王女様を旗印にした軍隊だったね？」
「敗戦直後、王族は全員が第一級戦犯として処刑された。それは俺も見ている。……酷いものだった」
レオンは、苦虫噛み潰したような表情を作る。敗戦直後、これから何が起こるのかを予見していたレオンはすぐさま混乱する首都を去ろうとした。その時に、見たのだ。
この国を導いてきた王族と宰相の首が、落とされるのを。
「……敗戦国の指導者の末路は悲惨だ。よくて永久拘束、普通なら死罪。だが、あれはいくらなんでもやり過ぎだろう」
「そうさね……やったのは、大日本帝国の侍だったかね？」
アルビナの言葉に、レオンは頷く。処刑の日、王族と宰相の首を落としたのは大戦における最大の戦勝国、大日本帝国の女侍だった。
今も、レオンは覚えている。酷く冷たい、冷淡な瞳。
「別に、恨むわけじゃない。落とした首は供養されたという話だ。だが、衆人環視の中でそれを行うことが、俺には理解できない」
「あれは、あの国の美学さね」
言ったのは、アルビナだ。アルビナは、更に言葉を続ける。
「元々、あの国のクーデターから始まった世界大戦……それについては何も言ってないけど、責任は感じてたはずだよ。そうでなけれ

ば、人としておかしいさね。だからこそ、自分たちの手で終止符を打ちに来たんだろうさ」
「処刑もか？」
レイドの問いかけ。元軍人であり、王族を敬う立場にあった彼には、処刑は許せないものだったのだろう。
アルビナは、そうさね、と言葉を紡いだ。
「レオン、王族と宰相は足掻いたかい？」
「いや、受け入れていた。恐怖の表情さえ浮かべずに、首を落とされたよ」
「なら、そういうことさね」
言い切るアルビナ。どういうことだ、というレイドの問いに、アルビナは頷いた。
「誇りある最期を……あの国の人間がよく口にする言葉さね。死の瞬間、みっともなく抗うわけではなく、戦争を終わらせるために潔く命を絶った王族。これ以上ない、誇りある最期さね。それをこの国の人間のうち、どれだけが受け入れてるのかは知らないけどね」
「……理解できん」
「ま、そうだろうね。他国の文化なんて、真髄まで理解できやしないよ」
くくっ、と笑うアルビナ。レオンが、話を戻すぞ、と言葉を紡いだ。
「反乱軍については眉唾も多かった。だから俺は今回もそうだと判断したわけだが、統治軍の動きを見るからにどうやら真実らしい」
「というと？」

「二日前、一個連隊が東部へと出立したさね」

ふう、と、息を吐きつつアルビナが言った。レオンが頷く。

「一個連隊、そこまでの戦力を何の確証もなく動かす指揮官はいない。いたとしたらそれはただの阿呆だ。統治軍の主体は精霊王国イギリスの軍隊だ。あの国は貴族政だが、女王エリザベスが相当キレる。その手腕は前大戦で十分に証明されているな。その女王が、ここへ無能者を送るとは思えない」

「そうさねぇ……確か、統治軍の頭やってる貴族のウィリアム・ロバートは徹底的な貴族主義者って話だけど、アルテア海戦を仕切ってイギリスの勝利を導いた男だって話だからねぇ」

「いっそ無能な奴が来てくれれば、どれだけ楽だったか」

レオンは肩を竦める。軍の指揮を執っている将軍も厄介だし、本当にやりにくい。

「で、その厄介なトップが一個連隊をどうして東部に？　あそこは――」

「アルツフェムの虐殺」

レイドの言葉を遮り、レオンは静かに口にした。アルビナとレイドが押し黙る。レオンが言葉を続けた。

「シベリア連邦東部最大の都市。前大戦で最大の激戦区になったそこへ、突如大日本帝国の神将騎二機を筆頭とした部隊が現れ、イタリア、フランス、シベリアの部隊及び民間人を鏖にした。……それ以来、あそこには誰も近付いていないはずだが……」

「叛乱軍の噂が立っているのは、そこさね」

アルビナは、もう一枚、新たな紙を取り出す。シベリア連邦の地図だ。その広大な国土のうち、東部の一点に記された赤印。アルビナはそれを指で示し、言葉を紡ぐ。

「真偽は定かじゃない。けれど、動いているのは事実。――さて、あんたたちはどうするさね？」

問いかけ。それに対し、二人は無言を通した。それを受け、アルビナは口元に笑みを刻む。そうしてから、彼女はバックパックを持ち上げ、二人に背を向けた。

「それじゃ、あたしは失礼するさね。それは餞別、お近付きの印としておこうか」

「今度は、どちらへ？」

「ここじゃない、どこかへ」

笑みを零すアルビナ。そのまま彼女は二人に背を向けると、言葉を残した。

「厄介事は御免だね。あんたたちも、程々にしときなよ」

「心得ている。またいずれ」

「互いに命があればねぇ、と」

アルビナが去っていく。それを見送ってから、レオンは紙片を手に取った。そして、そこへ描かれている情報を見て、眉をひそめる。

「……レイドさん」

「何だ？」

「俺たちは、一年以上戦ってきました。生き残ってこれたのは、護とレイドさん、あなたの経験のおかげだと思っています」

「いきなりどうした？」
レイドが眉をひそめる。レオンは、真剣な表情で問いかけた。
「――《赤獅子》に勝つ方法、心当たりがありますか？」
その問いかけの後、流れたのは、沈黙だった。
数秒、あるいは数分か。それが流れた後、レイドが静かに言葉を紡いだ。
「先日の基地襲撃もそうだが。お前は、いつだって勝ち目が薄い戦いに勝機を見出してきだろうが。違うか？」
「そうだといいんですが、ね」
ふう、と息を吐くレオン。レイドは鼻を鳴らすと、それで、と問いかけた。
「レベッカはどうした？」
「地下で〈フェンリル〉とあれの整備をしています。休め、とは言ったのですが」
「そうか」
頷くと、レイドは窓を開けた。冷たい外気が流れ込む。
「いつになれば、この国を変えられるんだろうな？」
その問いに、レオンは答えなかった。
答えられなかった。

◇　◇　◇

吐く気が白い。冷たい外気に震える体は、熱を欲している。
ほう、と、両手に向かって息を吐きかけた。吐息で手を温めるというのは、気休めのようなものだ。実際に温まるということはほとんどない。
もう一度、息を吐いた。生まれた時からこの国にいるが、この寒さは未だに辛い。

「……」

吐息を零しながら、少女――アリス・クラフトマンは空を見上げた。灰色の空は、今にも雪が降り出しそうだ。
白髪の長い髪と、灰色の瞳。そんな彼女は生粋のシベリア人である。そう、つまりは敗戦国の人間だ。それ故か、道を歩む彼女は歩道を通ることをせず、車道の隅を俯きながら歩いている。
統治軍によって統制され、本来の住民たちがスラムへと追いやられている首都モスクワ。その中心部は閑散としているかというと、そうでもない。統治軍の兵士たちの家族や、利権を求める貴族たち。他国からの人間が集まっており、賑わっている。
――しかし、そこにシベリア人の姿はない。
それが、この国の現状だ。首都であるはずの都市の中心に、その国の人間がいない。敗戦国としてシベリアがどんな扱いを受けているかはこれで理解できるだろう。

道を歩んでいく。アリス。それなりに賑わっているのに、彼女の周囲にはまるで壁でもあるように誰もいない。いや、実際、壁があるのだ。
人種の壁。

勝者と敗者の壁。
彼女の歩みを遠巻きに見ている者たちは、誰もが眉をひそめている。その目は、明確に一つのことを告げていた。
『何故、シベリア人が歩いている？』
冷静に考えればおかしな台詞だが、これが現実だ。敗戦国の人間に、居場所などない。
「……ッ」
歯を食い縛り、アリスは逃げるように――いや、実際に路地裏へと逃げ込んだ。浅く息を吐きつつ、誰にも見られていないのを確認すると、その場にしゃがみ込む。
……怖い。
アリスは、小さくそう呟いた。元々、人と距離を取ることが苦手だった。だからどうしても一歩引いてしまい、結果、独りになってしまう。友達と呼べる相手など、本当に数えるほどしかいなかった。
そしてその友達とも、戦争のせいで引き裂かれて散り散りになり、独りになって。
家族というものを喪っていた彼女は、本当の意味で天涯孤独の身だった。
だが、彼女自身はそれでいいと思っていた。一人で生きていくことは難しい。だが、できないことではないとそう感じていたし、事実、そうしていた。
けれど、彼女は、出会ったのだ。
手を差し伸べてくれた、不器用だけど温かい、あの人に。
だから――

「にゃあ」

不意に聞こえた鳴き声に、ビクリとアリスは体を震わせた。見ると、黒い体毛の子猫がこちらを見ている。

「あ、えっ、えっと」

いきなりのことに、少々焦る。ポケットから何かないかと探るが、何もない。

だが、子猫はそんなこちらの気持ちを知ってか知らずか、すり寄ってきた。アリスは、そっか、と小さく呟く。

「キミも、一人なんだね」

抱き上げる。すると、すんなりと持ち上げさせてくれた。それどころかこちらの肩に上り、頬を摺り寄せてくる。

……温かい。

くすぐったさと同時に、そんなことを感じた。アリスは立ち上がると、子猫を肩に乗せたままに歩き出した。中心地とは逆方向。人が集まる場所へだ。

スラムと中心の境界線。暗黙のルールとして誰も住まうことがなく、結果、廃墟同然となっている場所。その一角に、彼女は足を踏み入れた。

「にゃあ」

「――あっ」

不意に、肩の猫が飛び降りた。アリスは慌てて追うが、子猫とはいえ猫である。その速さは、人のそれより遥かに速い。

反射的に子猫を追う。しかし、すぐに見失ってしまった。

「……」

吐息を零す。人のいない静かな世界に、その音は大きく響き渡った。

寒さに体を震わせながら、アリスは歩き出した。

数分後、彼女はその場所に辿り着く。

誰も住まないようになり、荒れてしまった市街地。その一角に、その小さな一軒家は存在していた。窓ガラスは全てなくなり、建物自体もかなり傷んでしまっている。

キィ、という音を立て、アリスは扉を開けた。入り込んだ先にあるのは、荒れた室内。

「……」

ほう、と、もう一度吐息を零した。アリスは、この場所にいたとある少年のことを思い出す。

二年前まで、シベリア連邦は首都に座す王の下、地方の領主がそれぞれの領地を治めるという統治形式をとっていた。国土があまりにも広大であるためだ。しかし、二年前の戦争ではそれが災いした。

各地を治める領主は、それぞれの軍隊というものを有していた。そして戦争において一番被害をこうむったのは、ＥＵ連合――当時、戦争のために欧州諸国が作り上げた――と接している地域だ。戦争開始当初はシベリア連邦・中華帝国連合軍の優勢であったために、シベリアの領主たちも問題なく国のために戦っていた。

しかし、大日本帝国――大戦の発端となった極東の島国が参戦したことで、状況が大きく変わる。

帝の、一刻も早い世界の安寧を求めるという意志の下、彼らは中華帝国に進撃。瞬く間に戦況を動かすと、大戦の英雄たる藤堂玄十

郎のてによって、中華帝国皇帝を、皇帝に反逆し、その身柄を拘束していた中華議会から奪取。中華帝国を制圧した。
そして、大日本帝国に初めから協力していた合衆国アメリカと、その推移を見て彼らの側についたＥＵを始めとする諸国に囲まれ、シベリア連邦は追い詰められていくことになった。
そして、最大の激戦となった『アルツフェムの虐殺』と呼ばれる戦いの後、各地の領主たちは勝手に降伏を始め、連合軍は一気に首都モスクワへと攻め込んでくることになる。その時、王族の下した決定は『徹底抗戦』――結果、アリスはそれによって徴兵を受け、二か月にも渡る泥沼の防衛戦に参加することになった。

ここは、戦場となった場所からかなり近い場所である。
徴兵され、右も左もわからない中で、使い方もわからない銃を握らされ、俯いているだけだった自分。そんな自分に、彼だけが、声をかけてくれたのだ。

「……こっちだよ」

アリスは、呟いた。
彼がくれた言葉を。
彼がいない、彼が生きていたはずの場所で。
ため息が零れた。もう何度目だろうか。
彼と交わした小さな約束だけを縁（よすが）に、こんなところで――……

「――何をしている」

ビクッ、と、いきなりの声に体が震えた。反射的に振り向こうと

する。しかし。

「動くな」

カキン、という撃鉄を起こす音と共に発せられたその言葉のせいで、動きを封じられた。

停滞が生まれる。振り向くならば、声を聴いた一瞬しかチャンスはなかった。だが、それを潰されてしまった。

どうする、どうすれば、と、焦りだけが募っていく。その最中、背後に立つ人物が言葉を紡いだ。

「ここで、何をしていた。ここは、誰も住まない場所、シベリアの敗戦の象徴だろう？」

その言葉に何かが込められていると思ったのは、何故だろうか。

アリスは両手を挙げ、反抗の意志がないことを示しながら、言葉を紡いだ。

「シベリア連邦の敗北は、どうでもいいです。いえ、どうでも良くはないですけど……それよりも、ここは、大切な場所なんです」

「大切な場所？」

言葉が返ってきた。アリスは、はい、と頷いた。

嘘を吐いてもいい。だが、吐く必要ないと彼女は思った。吐いても吐かずとも意味はない。関係ないのだから。

「約束をしました。世界を旅すると。ここは、その相手が暮らしていた場所です」

この国しか知らず、戦争のせいで他国が恐怖の対象にしか見えな

かった。
だからこそ、見たいと思い、知りたいと思った。他国はどんな場所なのかを。
「約、束」
不意に、呻くような声が聞こえた。気配でわかる。相手が、銃を降ろした。
だが、振り向かない。アリスは言葉を待つ。そして。
「その相手の名前は、護、か……？」
「……ッ！？」
投げかけられた言葉に、アリスは驚愕と共に振り返った。視界に入るのは、光を背にした黒髪の青年。
その青年は、呆然とした瞳でこちらを見ながら、言葉を紡ぐ。
「アリス……？」
愕然。そして——静寂。
アリスは、紡がれた言葉に対して、返事ができなかった。
しかし、青年はなおも言葉を続けてくる。
「アリス、なのか？」
言葉を返せない。
何故。

なんで。
どうして。

そんな、思考しているようで思考をしていない言葉だけが頭の中を駆け巡る。
まさか、と、アリスは思い。
しかし、すぐさま理性でそれを否定した。
期待してはいけない。そんなはずがないのだ。

――頬を、温かい何かが伝った。
同時に、がくがくと体が震えた。

わけのわからない感情で。
整理できない思考で。

青年が、言葉を紡ぐ。

「聞かせてくれ。……その相手の名前は、何だ？」
「……護……、護・アストラーデ」

唇から、勝手に言葉が漏れた。涙が止まらない。
青年の――否、護の瞳からも、涙が溢れた。

「――アリス！！」

青年は銃を放り捨てた。

「――護さん！！」

少女は駆け出した。

飛びつくように地面を蹴った少女を。
青年が――抱き締めた。

互いに、強く、強く、相手を抱き締める。

互いから伝わる確かな温もりが。
今この瞬間こそが夢ではないという真実を教えてくれる。

二年前……二人は、小さな約束をした。

平和になったら。
世界を、一緒に見に行こう。

孤独な生活を強いられてきた二人。
故に出会うことができた二人が交わした、小さな約束。
信じていても、疑っていた。
生きているのかと。
もう、会えないのではないのかと。

軋んでいた心に、確かな、しかし、強い火が灯った――

## 第二話　再会は、幸か不幸か（後書き）

というわけで、第二話です。
うむ、混沌としてきました。とりあえずは現状把握と、シベリア編においては主軸となる二人の再会と言うことでここはひとつ。

今回の新キャラ、伊狩・S・アルビナですが、フュージョニスト先生より頂いたキャラクターです。フュージョニスト先生、ありがとうございます。

さてさて、第五話まで爆走モード前回、勢い最優先で行くつもりです。詳しいものごとの説明はその場その場でしているつもりですが、わからなければ感想なりメッセージなどください。

というわけで、お付き合いいただけて幸いです。
感想などを頂けると嬉しいです。

ありがとうございました。

## 間章　道程の果てに

一人の少年がいた。
少年は、父親が違う国の人間だった。黒い髪と黒い瞳。父が生まれたという国は、極東の島国。
少年の母親は、極北の人間だった。生まれ、育った国で父に出会い、少年を生んだという。

少年の容姿は、父の血の影響もあって特異なものだった。少年が生きる国にいて黒髪というのは珍しく、少年はよくそれらをからかわれた。
少年は、人との付き合いが苦手だった。愛情という感情を向けてくれるのが、両親だけだったからだ。
人は、自分に向けられたことのある感情しか表現することはできない。少年に向けられる感情は、奇異と敬遠だけだった。故にこそ、少年には人への近付き方というのものがわからなかった。

しかし――少年は歪まなかった。

両親の愛情がそうさせたのだろう。真っ直ぐに、純粋に、少年は育っていった。
正義を信じ、条理を信じ、道理を信じていった。

だが――それを、打ち壊す者がいた。
戦争が、彼の父を奪い、母を奪った。

道理に合わない。
条理に合わない。

だというのに、世界はそれを内包する。
軋んでいく心。何もかもが崩れていく世界の中で。
その心を満たす出来事が、生まれた。

少年は――一人の少女と出会った。
少女は、少年にとって対等と呼べる存在になった。
故に彼は、踏み止まった。

一人の少女がいた。
少女は、この国しか知らず、両親さえも知らない身だった。
親がいない、ということを理解してしまったのは、五歳の時。

それ以来、少女は現実という壁にその人生を幾度となく阻まれることになる。
両親の有無。そして、愛情というものを感じることが極端に少なかったが故の、人に対する根本的な恐怖。それがどうしても拭えず、いつも少女は一人きりだった。

一人で生きていこうと、少女は決めた。それでいいと。そうやって、生きていけると。
以来、少女は俯くようになった。俯き、なるべく他人と関わらないように――いや、深く関わらないことで、嫌われないようにしようとしたのだ。
そのうち、少女は周囲に壁を作りながらも、一定の評価を得られるようになった。
人付き合いは苦手で、俯いてばかりだが、仕事は真面目。そういう評価を得ていった。

しかし――少女の現実は、そこで壊れる。

戦争が始まり、まともな仕事さえもできなくなってしまった。苦しくなっていく生活。その中で、少女は戦争の末期に一つの現実を突きつけられる。

――強制徴兵。

親もおらず、保証人の一人もいない少女に、国に逆らう術などなかった。放り込まれたのは、泥沼の防衛戦。銃の扱い方も知らず、人と話す術さえも知らなかった少女は、そこで更に俯くようになった。

涙を堪え。

震える体を押さえつけ。

たった一人で――耐えていた。

だが、そんな少女は、まだ、見捨てられてはいなかった。

その場所で、世界で最も醜悪だという場所で、少女は出会ったのだ。

少女は、一人の少年に出会った。

少年は、少女にとって唯一無二の存在となった。

故に少女は――笑うことができた。

二人は今、ここで再会した。

しかし。

その再会が偶然であるはずがないと、何故、二人は気付けなかっ

たのか。

敗戦国で、敗戦者同士が占領下の都市で偶然に出会うことなど、あるはずがないというのに。

思えば――この時からすでに、始まっていたのだろう。

終わりの、始まりが。

## 間章　道程の果てに（後書き）

捕捉のような、そんな感じですね？

この物語は群青劇ですが、中心にいるのはやはりこの二人です。

## 第三話　譲れないモノ

バタン、という、扉を閉める音が響き渡った。青のかかった黒髪の青年が入室したためだ。

「第十三遊撃小隊隊長、ソラ・ヤナギです」

敬礼し、青年――ソラが言った。先に来ていた人物、カルリーネ・シュトレンが、ああ、と頷く。二人が襟元に着けている階級は、互いに『大尉』であることを示している。だが、二人の雰囲気は対等などではなく、上司と部下というもののそれに近かった。

カルリーネは振り返ると、それで、と言葉を紡いだ。

「どうだった？」

「口が硬いですね。三日間、体に聞きましたが……吐いたのは人数くらいです」

「……雑兵風情が」

舌打ちでも零しそうな表情でカルリーネが言う。ソラは肩を竦めた。

「正直、ショックですけどね。あれだけやって吐かなかったなんて……甘かったのかな、とか思います」

「どういう方法を取った？」

「まず、右耳を落としました」

サラリと、ソラは言葉を紡いだ。カルリーネが眉をひそめる。構わず、ソラは続けた。

「で、左耳。次は鼻で、その次は左手――ああ、あの人は利き腕が左らしかったんで右からですね。小指から順に指を削ぎました。その後――」
「もういい」

続けようとしたソラの言葉を、カルリーネが遮った。そうしてから、彼女は睨むようにソラを見る。

「貴様の部隊は、確かにそういう役目も追わされているが……今回も、やはり貴様が担当したのか？」
「フォルスナー准尉には協力してもらいましたが、まあ、実質一人ですね。それが何か？」
「貴様は、自分自身の手を汚すことを何とも思わんのか？　私は貴様を評価している。身分なき孤児であり、？奏者？でもない身でありながらもそれほどの才覚を発揮する貴様をだ。その貴様がこのような身で満足している現状が許せん。……何を考えている？」
「別に何も考えてませんよ？」

ソラは、苦笑と共に肩を竦めた。

「懲罰部隊とか、落ちこぼれ部隊とか、ウチの部隊は色々と言われていますが……あそこが、自分みたいなのにはちょうどいい場所ですよ。分相応です」
「『アルツフェムの虐殺』を切り抜けた英雄の台詞が、それか？」
「英雄？　違いますよ」

ソラは、首を左右に振る。

「あそこで救えなかったのが、自分という人間の弱さです」

後悔を内包したその言葉に、カルリーネは、そうか、とだけ頷いた。そして。

「……では、話を戻そう。ヤナギ、お前は奴らの動きをどう見る？」

「もう首都についていると思います」

頷くソラの返答。カルリーネは、ほう、と眉をひそめた。

「いくらなんでも、それは無茶だろう。襲撃から何日経っていると思っている？　私たちが戻ったのが二日前。それは最短距離を通ったからだ。奴らに同等以上の速度があると？」

「あるでしょうね。そもそも、彼らの奇襲のような襲撃はその類が多いんです。テロリストであるため、真っ当な道を通れません。なので、ほとんどの指揮官は到着を遅く見積もり、結果、奇襲を受けています。おそらくですが、奴ら――《氷狼》には、距離を縮める魔法でもあるのでは？」

最後は冗談めかしてソラは言った。カルリーネはしかし、真面目な表情を崩さず、ならば、と言葉を紡ぐ。

「そいつらは今、どこにいる？」

「スラムですね」

断言するようにソラは言った。更に。

「おそらく、奴らはスラムに潜んでいると思います。ウチの……ええと、？奏者？がよくスラムへは行くようでして。その際、そのような話を噂で聞いたとか」

「……あの人形か」

ちっ、と、不快感を隠そうともせずにカルリーネは舌打ちを零した。ソラはそれを無視し、言葉を続ける。

「まあ、自分も直接聞いたわけじゃないんで。ですが、実際にいるとしたらあそこぐらいしか居場所がないのも事実ですよ」

「そうか。……ならば、潰せばいい」

結論は単純だった。カルリーネは、更に言葉を続ける。

「私は総督よりここの防衛任務の権限を与えられている。私のすべきことは一つだ。そう、あらゆる手を使い、反抗する勢力を叩き潰すこと。EUの……欧州の覇権のためにだ」

「……」

ソラは無言。対し、カルリーネは言葉を紡いだ。

「国を導き、支えるのは選ばれし存在こそが為すべきことだ。だというのに、敗戦国の平民如きが、私たちの導きに従わず、地を這う鼠に希望を抱くと？――笑止、愚昧と言う他ない」

国を導くのは、王や貴族という存在だと、ドイツの有力貴族たる彼女自身はそう思っている。事実、革命が起こったフランスや、国王自らが共和制を望んだスペインなどの例外を除き、欧州のほとんどは未だに王政、貴族政だ。そして、それ故にどの国も国として確固たるあり方を示している。

事実、フランスやスペインは他国に交渉で後れを取ることも多い。合議制というのは判断に時間がかかるためだ。戦争の際も、それによって参戦が遅れ、フランスなどは無理をした結果、痛い敗戦をもらっている。

「この都市に、鼠がいるというのなら。いいでしょう。狩ろうではありませんか」

ソラが眉をひそめた。カルリーネの口調の変化。それは、彼女が貴族として、千年ドイツ大帝国の名門貴族、シュトレン家の当主として動く時だ。

「――狩られる恐怖、とくと味わわせて差し上げましょう」

眼下、彼女が醜悪と断ずる場所を睨み据えながら。

カルリーネは、呟いた。

◇　◇　◇

再会した二人の言葉を交わす時間は、そう、長くなかった。

護が持っていた通信機……それが鳴り、彼が何かしらの言葉を受けたからだ。なんだろう、とは思ったが、アリスは聞かないことにした。教えてくれることならば、おしえてくれるはずだ。

何事かを話し込んでいる護。その背中を見、アリスは思った。

……広い、なぁ。

大きな背中。一緒にいた期間は精々数ヶ月だったが、その時に見た背中よりも、少し大きく感じる。そう感じてしまうのは、自分が弱くなったからなのだろうか。

弱い。

その単語に、アリスは両の掌を重ね合わせ、強く握り締めた。駄目だ、と思う。自分がここにいるのは、もう、自分だけの理由では

ないのだから。

「アリス」

不意に、名前を呼ばれた。体を反応させながら前を見ると、護が申し訳なさそうな表情でこちらを見ていた。

「悪いな、あまり長くいられない」

「そ、そうなんだ」

残念、という感情がそのまま浮かんでしまったのだろう。護はこちらに歩いてくると、こちらの頭を撫でてきた。

「すまん。けど、またすぐに会える。アリスはさ、ここにいるんだろ？」

「は、はい。一応、ここに……」

「じゃあ、また会える。絶対だ。――会えて良かった」

護の手が離れる。あっ、という言葉が漏れると同時に、護はアリスから一歩離れると、言葉を紡いだ。

「アリス。約束は、必ず守る」

――その時、護の言葉に、その意味をくみ取れなかったのは、何故なのか。

「世界を見に行こう。一緒に」

――信じたくなかったからだろう。故に、アリスは。

「だからさ。――待っててくれ」

その時――手を伸ばせなかった。

護が立ち去っていく。その足の速さは彼女の目から見ても相当なもので、すぐに見えなくなった。

吐息を零す。だが、それは先程までの憂鬱なものではない。

「……会えた」

頬が上気し、顔が熱いのがわかる。

会えないと思っていた。生きているはずだと信じていても、やはり、疑いはあったのだ。

砕かれた外壁から落ちていく彼に、手を伸ばせなかったあの日から、ずっと。

「会えたよ……！」

膝を折り、アリスはしゃがみ込む。

溢れ出す涙は止まらない。堰を切ったように涙が溢れてくる。

嬉しさしかない。しかも、約束を――あんなちっぽけな約束を、覚えていてくれたのだ。これ以上はないではないか。

良かった、と、アリスは思った。

自分が選んだ場所は、今でこそ温かいが辛い場所だった。だが、そんな場所でも必死になって頑張ってきてよかったと、そう、彼女は思った。

自分の全ては、何一つ、無駄ではなかったのだ――

「良かった……！」

生きていてくれた。
覚えていてくれた。
こんなちっぽけなものを、
自分などという矮小な存在を。

覚えていて――くれたのだ。

「良かったよ……ッ！」

……どれぐらい、そうしていたのか。
彼女が立ち上がったのは、月が昇ってからだった。彼女は赤くなった目で、しかし、笑みを浮かべて家屋を出る。その時。

「――中尉！！」

声が響いた。そちらを見ると、バンダナを頭に巻いた、茶髪の少女が走ってきた。統治軍のコートを纏う彼女は、その手にもう一つ、コートを持っている。

「何しとるんですか、こんなとこで」
「ご、ごめんなさい」

アリスは慌てて頭を下げる。すると、少女は慌てたように手を振った。

「ああ、やめてくださいそんな。ウチより中尉の方が偉いんですさかいに」

「で、でも。私は……その……」
「――ええんです」

俯くアリス。そのアリスに、少女が楽しそうに言葉を紡いだ。

「中尉が、どんな意味を持ってここにいるんかは知っとります。隊長は何も言いませんけど、何となく、ウチらは理解してます。だから、そんな顔、せんでくれませんか？」

独特の言葉遣いで、少女はそんな言葉を紡ぐ。そのまま、彼女はコートをアリスに差し出しながら、言葉を紡いだ。

「中尉は、ウチらを何度も助けてくれたやないですか。上の変な評価とかは、ウチらなんかにはどうでもええんです。隊長がそうしてくれとるように、中尉も歯を食い縛って戦ってくれとる。それだけで、ええんです」
「う、うん」

頷きながら、アリスはそれでもどこか震える手でコートを受け取った。それを身に纏う。
そのコートに記された階級章は――中尉。
統治軍において、士官であることを示すものが、着けられていた。

「ほな、伝令を伝えます」

少女が一歩引き、敬礼をした。そのまま、少女は言葉を紡ぐ。

「第十三遊撃小隊に命令が下されました。本日二二〇〇に、スラムへの侵攻を開始します。我々は万一に備え、後方待機。――アリス・クラフトマン中尉は、〈ワルキューレ〉にて待機を」

アリスは敬礼を返しながら、目を見開いた。スラムへの侵攻。そんなもの、自分は聞かされていない。聞いていない。
何かを言おうとする。だが、アリスは唇を引き結んだ。
――何かを言う権利など、彼女には、ありはしない。
中尉というのは名ばかりなのだ。何かを口にする権利も、何も、ありはしないのだ。

「……任務、了解しました」

震える声で、彼女は頷いた。そうしてから、スラムがある方角を見る。時間は、もう、ほとんど残っていなかった。
歩き出す。そんなアリスに、少女が問いを投げかけた。

「何か――ありましたか？」

対し、アリスは頷いた。

「少しだけ、だけど大きいものが」

◇　◇　◇

アリスとの再会で逸る気持ちと共に戻った護に叩き付けられたのは、鈍い打撃のような現実だった。思わず、護は声を上げる。

「死んだ、だと？」

今しがた聞かされた事実に対し、護は絞り出すように言葉を紡い

だ。レオンが頷く。
「死んだよ。ザイルさんはな」
「ふざけんなッ！！」
ダンッ、という凄まじい音を立て、護が机を叩く。レイドが、坊主、と言葉を紡いだ。
「叫んで何かが変わるか？　寝惚けるなよ、坊主。俺たちは戦争をしてんだ」
「けどよ……！」
「話を戻すぞ。ザイルさんは仕事に関しては信用できる人だ。その人が帰って来ず、更に、統治軍の動きがおかしい。……捕まって、生かしておく意味がなければ殺されている」
レオンが、組んだ手を強く握り締める。護は、くそっ、と吐き捨てた。
「だったら何だよ？　俺たちがいるのはもう向こうに知られてんのか？」
「それはわからない。だが、まず有り得ないだろう。俺たちはここへ戻ってくるのに、地下の巨大通路を使った。更に機動力は神将騎でだ。この速度を向こうが予測できるとは思えん」
レオンは言い切る。そう、護たちがここ――首都に、普通なら辿り着けない速度で帰還したのは、それが理由だ。遥か古代から存在する、シベリア連邦の地下に存在する広大な地下道。全容は誰も知らないそれの一部を用い、護たちは今まで活動してきた。
無論、統治軍も地下道の存在は知っている。だが、その構造の把握などその坑道の広さ故にできるはずがなく、また、出入り口の全

てを捕捉できているわけでもないため、先手が打てる。
また、その坑道を通るのは護が操る神将騎〈フェンリル〉だ。その速度は、文字通り圧倒的である。伊達に現代最強の兵器というわけではない。速度も、出力も、神将騎というのは圧倒的なのだ。

そうなのか、と護が呟く。レオンは頷きながら、だが、と言葉を紡いだ。

「ここに長居することもできなくなった。今夜中にここを発つぞ」
「随分早ぇな」
「当然だ」

護の言葉に対し、応じたのはレイドだった。彼は、いいか、と前置きしながら言葉を紡ぐ。

「俺たちが今までやってこれたのは、ゲリラ戦をやってきたからこそだ。正面から軍隊とやり合って、勝てるはずがないんだよ坊主」
「更に、今までは避けてきたが、首都には統治軍の本隊がある。勝てる道理はない」

二人が言い切る。護は、ちっ、と舌打ちを零した。

「わかった。俺はどうすればいい？」
「とりあえずはここで待機だ。今、下でレベッカが〈フェンリル〉の調整をしてくれてる。それが終わり次第、出発だな」
「わかった」

護は頷く。頷きながら、彼は今日の出来事を思い出していた。

（アリス……）

再会した相手。約束の相手。
二年間。酷く、どうしようもないほどに長かったように思う。この二年の間に、忘れなかった日はない。

交わした約束を。
小さな、誓いを。

目を閉じ、護は確かめる。自らがここにいる理由を。
ここまで戦ってきた理由を。
――故に。

「なあ、レオン」

レオンに背を向けたまま、護は言葉を紡いだ。何だ、という問いが返ってくる。護は頷いた。

「俺は――この国を取り戻す」
「……キツい道だぞ。前にも言ったが」
「構わねぇ」

護は言い切る。
約束を交わしたのだ。平和になったら、と。
そして今、この国は平和じゃない。ならば。

平和にするしか――ないではないか。

「俺は、必ず勝つ」

言い切った時だった。

『スラム街の者たちに告ぐ！！　貴様らがテロリストを匿っているという情報が入った！！』

外から、そんな声が聞こえてきたのは。

『全員、家屋から外へ出ろ！！』

響き渡る声。拡声器によってスラムへと広がる声の中、背後でレオンが言葉を紡いだ。

「……護」

何だ、と、護が問いかける。レオンは、冷たい声で言葉を紡いだ。

「お前が本当にこの国を救いたい、なんて言うのなら……耐えろよ」

◇　◇　◇

統治軍本部の片隅。倉庫のような建物に、一つの影が入り込んだ。ソラ・ヤナギ。統治軍の大尉だ。

「お疲れさん、っと」

軽い調子で、ソラはその扉をくぐる。すると、中には既に十人くらいの軍人がいた。全員がそれぞれ、おいーっす、やら、どうもー、

などといった適当な挨拶を返してくる。軍隊の規律としてこれはアウトだが、ソラが気にした様子はない。働く時に働いてくれればそれでいいのだ。

ソラはそれぞれの動き――見た目は緩んでいるが、空気は引き締まっている――を見ながら、一番奥で膝をついている巨人の方へと向かっていく。

神将騎――〈ワルキューレ〉。

白銀の装甲を持ち、まるで騎士甲冑を纏う騎士のような姿をしたそれは、まるで主を讃える騎士のような姿で頭を垂れている。その足下には、二つの人影。

「……やさかい、やっぱり近接格闘が主体で組まれとるんやと思います」

「な、成程。それだとやっぱり、射撃は……？」

「うん、牽制程度ですね」

頷き合うのは、ソラの隊における唯一の女性二人だ。花が二つ揃って何の話をしているかと思えば、神将騎の話とは。色気がない。

「うっす、リィラ。アリス」

「あ、隊長。どうもです～」

「あ、お、お疲れ様です」

気楽な挨拶と、頭まで下げてくる挨拶。ここに二人の性格の差が表れている。

「ええと、アリス？　何、俺怖い？」

「え、いや、そ、そんなことないですよ！？」

「いや怖いやろ。隊長は怖いで」

必死に両手を顔の前で振るアリスの横で、茶髪のバンダナを着けた少女――リィラ・夢路・ソレイユがうんうんと頷く。ソラは、そんなリィラに半目を向けた。

「何でお前が答えるんだよ、リィラ？」
「だって隊長鬼畜やもん」
「はぁ？　どこがだ？」
「……こんなにも隊長のこと想ってるのに、デートの誘い一つないなんて、ウチ、ウチ……ッ！」
「リィラ。今すぐ嘘泣きをやめろそして馬鹿ども銃を降ろせっていうか上官に銃向けてんじゃねぇ！」
「隊長、あんたは俺たちの敵だ」
「ああそうかい。じゃあかかってこいや」
「あ、あの、そ、そこまでに」

ファイティングポーズをとるソラと、彼を囲む男隊員たち。謎の死闘が始まりそうだったのを、アリスが割って入って止めた。ソラが、ふう、と息を吐く。

「さて、アリスの言う通り冗談はここまでだ」
「ウチの想いは冗談なんかやない……ッ！」
「だから銃を降ろせ。そしてお前はこれ以上話をややこしくすんな」

ふう、と、ソラがもう一度ため息を吐く。そうしてから彼が目をゆっくりと開けると、全員の空気が変わっていた。ソラは、いいか、と前置きしてから言葉を紡ぐ。

「今回のスラム侵攻について、俺たちは後方待機だ。だが、必ず動く時が来る。その気でいろ」

「あの、隊長」
隊員の一人が声を上げた。ソラが視線で促すと、その隊員は頷きながら言葉を紡ぐ。
「スラム侵攻、何故自分たちが待機なのですか？」
「ん？　ああ、正義だからだ」
正義、という言葉に、全員が同時に眉をひそめた。その光景を見て、ソラは、まあそうだろうな、と納得する。
第十三遊撃小隊――統治軍において末端、記録上にもほとんど姿を見せないソラの小隊は、文字通り『捨て駒』の部隊である。可能よりも不可能に天秤が傾くような任務ばかりを背負わされる。そんな部隊だ。
それは所謂『正規部隊』の損害を減らすために存在する部隊であり、また、別の側面も担っている。
――曰く、『正規部隊にはできないことをする部隊』だ。
軍隊は、綺麗事だけでは回らない。卑怯だと言われるようなことを平然とする必要がある。だが、政治がそうであるように、綺麗事を見せる必要がある。その上で、汚いことを担当する闇の部分というのが必要になるのだ。
それが、第十三遊撃小隊である。
そして、今回の作戦、スラムへの侵攻というのは普通に考えれば汚れ仕事。彼らの領分である。だが、ソラはそんなことはない、と言葉を紡いだ。
「これがもし、市街地へだったら俺たちの任務だろうけどな。相手はスラムだ。俺たちの領分じゃない」
「どういうことですか？」

「スラムってのは、言葉からしてイメージが悪いだろ？　要するにそういうことだよ。あれを潰すってのは、ここの治安維持を行うことになるんだな、これが。少なくとも本国――ってかＥＵにはそう説明できる」

言いながら、事実、とソラは思った。実際はそこまで酷くないのだろうが、犯罪の発生や疫病の蔓延など、理由を挙げればきりがない。それがでっち上げでいいというのだから尚更だ。

……何せ、相手はシベリア人だしな……。

そんな風に内心で言葉を作るソラに、でも、とアリスが言葉を紡いだ。

「そ、それでも、スラムを攻撃というのは民間人への攻撃ですし、やっぱり……汚れ仕事なのでは？」

言葉がしっかりしてきたな、と思いながら、んー、とソラは唸る。言うべきか否か……まあ、言わない意味もない、と判断し、言葉を作る。

「言い難いけどな、統治軍にとって――いや、ＥＵにとって、シベリア人は『どうでもいい』存在なんだよ」

「……！」

アリスが目を見開く。その横でリィラがこちらを睨み付けているが、黙っていても仕方がないことである。故に、ソラは言葉を続けた。

「世界は平等なんかじゃない。この国は敗戦国で、シベリア人は敗北者だ。ＥＵはＥＵの――というか、あれだな。自分の国の利益しか考えてないんだよ。いちいちシベリアのこと考えると思うか？」

「……まあ、考えへんやろうなぁ」
「……」
　呟くように言うリィラの横で、アリスが俯く。ソラは、まあ、と肩を竦めた。
「悩んだところで、俺たちには何もできんよ。俺たちは懲罰部隊。爪弾き者。掃き溜めだ。従うしかできず、それだけでいい。――アリス・クラフトマン中尉。お前は、そういう道を選んだんだろう？」
　厳しい言葉だ、とは思いながら、ソラは言った。
　アリスがここにいる理由。背後の〈ワルキューレ〉と、一つの契約が彼女に辛い立場を強いている。それを皆知っているからこそ、彼女を仲間と信じているのであり、信じてくれている。
「……」
　リィラが険しい表情でこちらを見ている。おそらく後で説教されるのだろうが、嫌われるのも指揮官の仕事の一つだ。……まあ、ここの隊員たちは、結局、皆がなんだかんだでついてきてくれるのだが。
　だからソラはぼかすことをせず、正面から言葉を叩き付けた。
「こちら側に来ることで、シベリア連邦の服従を示した。『ＥＵのために殉職したシベリア人の奏者』――お前さんが選んで、与えられた立場はそれだろう？」
「――隊長」
「黙ってろ、ソレイユ戦車長」
　見かねたらしいリィラの言葉に、ソラは一瞥と共にそう言葉を叩

き付けた。説教は後で聞く。今ではない。
まだ言いたいことはあった。だが、ソラは一度ゆっくりと息を吐いて自分を落ち着かせると、強引に占めるための言葉を紡いだ。
「総員待機だ。今夜は忙しくなる。――応答は？」
「……、――了解」
逡巡があり、しかし、確かな応答があった。だからソラは、うん、と頷く。
「後悔したくないから、ここにいるんだろ？　だったら、今までを否定するようなことをするな」
そして、ソラは隊員たちに背を向ける。その中で、ああ、と彼は一人、苦笑を零した。
――慣れないよなぁ、こういうの……。

◇　◇　◇

残されたアリスは、しばらく動くことができなかった。
隊長――ソラ・ヤナギ。自分がここに配属されてからの約二年間、ずっと指揮を執っている人物。尊敬しているし、その能力や人格についても信頼している。
だが、そのソラでさえ、どうしようもないのだと言った。
見ているしかないのだと。いつも、隠れるようにして訪れていたあの場所が潰されるのを――スラムが壊されるのを、黙って見ているしかないのだと。

嫌だ、と、アリスは思った。あそこには女子供しかいない。辛い毎日しかない。それでも歯を食い縛って生きている人たちがいる。あの人たちは、自分のような『裏切り者』に、手を差し伸べてくれた。

ふと、アリスは自身の背後を見上げた。

鎮座するのは、？神将騎？――〈ワルキューレ〉。

元々は前大戦でシベリア軍の主力として活躍し、東側の防衛の要だったという機体だ。しかし、戦争末期に東側――中華帝国の方面から侵攻してきた大日本帝国の軍隊を相手に敗北、鹵獲され、紆余曲折を経てＥＵの研究室に運ばれたという。

戦後、徴兵されたとはいえシベリア軍人であったアリスが？奏者？であると発覚、動かせる機体の適合の判断をした結果、統治軍では誰も扱えなかった〈ワルキューレ〉を唯一扱える存在として、敗戦国の人間でありながらも統治軍に所属している。

ふと、アリスは思った。

この子とならば、あるいはと。

自分は、この状況を――……

「中尉？」

不意に肩を掴まれた。ビクッ、と、自分でもわかるくらいに体を大きく震わせる。振り返ると、視線の先にはリィラ――自分以外では隊の中では唯一の女性隊員がいた。

「え、あ、ど、どうしました？」

「いや、それはこっちの台詞です。どないしはったんですか？」

リィラが心配そうな表情でこちらを見ている。何がですか、というアリスの問いかけに、リィラは頷いて応じた。

「何や、思いつめたような表情してはりましたよ？」

「そう……ですか？」

「うん。……あの、隊長の言うことは、その」

リィラが言い難そうに俯く。アリスは、首を左右に振った。

「大丈夫です。隊長の言うことも、理解しています」

だから、と、アリスは言った。自身の相棒たる機体を見上げながら、苦笑と共に。

「私は、大丈夫です」

その言葉に対し、リィラは何も言わず。

アリスは、静かに〈ワルキューレ〉へと乗り込んだ。

◇　◇　◇

護たち《氷狼》は、スラムの端にある小さな家屋に身を潜めていた。見た目はそれこそ家畜小屋のような装いだが、地下がシベリアに広がる大空洞に繋がっており、重宝している。

護はその家屋から視線を走らせ、外を見ながら、レオンへと言葉を紡ぐ。

「おいレオン。どういうことだよこれは？」
「俺が聞きたい。が、そうだな。……向こうも本気ということだろう」

護の正面。別の場所から外を睨むようにしているレオンが、外から視線を外さないままにそう言葉を紡いだ。
どういうことだ、と護は眉をひそめる。レオンはやはり護の方を見ないまま、言葉を続けた。

「状況からして、推測できるのは二つ。一つは、俺たちがここにいるということが漏れて、向こうがそれを潰しに来ているということ。もう一つは、俺たちがいるかどうかはどうでもよく、単純にここを潰しに来ている場合だ」
「いや、ちょっと待てよ。二つ目は何だ？　俺たちがいるって確証があるから、あいつらはここに来てんじゃねぇのか？」
「頭を使え、護」
「うるせぇ。どうせ俺は馬鹿だよ」
「そういう話じゃない。……いいか、よく考えてみろ」

ため息を吐き、レオンは初めて護の方へと視線を向けた。こつん、という音を立てて彼が手に持った長銃で床を叩き、レオンが言葉を紡いでくる。

「ここはどこだ？　スラムだ。護。スラム、という単語に対してどんなイメージを持つ？」
「ん？　そりゃあ、居心地良くて、ガキ共が走り回ってる場所だろ？」
「それは、このスラム限定の話だ。世間一般で言うところの、『外から見た貧民街』のイメージはどうだ？」

言われ、護は少し考え込む。スラム――貧民街。そのイメージは、決して良いものではない。むしろ――

「それだ、護」

まるで思考を見抜いたかのように、レオンが言った。

「統治する側にとって、スラムなんていうのは失くしてしまいたいものだ。いずれ何かしらの理由を付けて潰しにくるかもしれないとは思っていたが……まさか、な」

「……ちっ、どうする？」

「どうするも何も、撤退しか選択肢にはない。今、地下でレイドさんとレベッカが証拠隠滅含めて撤退の準備をしてくれている。それが済み次第、俺たちは地下から撤退だ」

「撤退……？」

護は眉をひそめた。そして、待てよ、と言葉を紡ぐ。

「テメェ、ここを見捨てるつもりか？」

「そうだな」

「ふざけん――」

叫びそうになった瞬間、銃口を向けられ、護は言葉を遮られた。レオンは静かに言葉を紡いでくる。

「静かにしろ。……耐えろと、俺はそう言ったはずだぞ」

「けど、レオン。俺たちは」

「俺たちがここで負けて、殺された時、どうなる？　希望は残らない。そうなれば終わりだぞ、護」

レオンの言うことはわかる。戦うための力を根こそぎ奪われた中、この二年で活動している者はそのほとんどが殺され、結果として自分たちしか今はもう活動していない。
そんな自分たちまで堕ちれば、確かにもう、どうしようもなくなる。それはわかる。だが、そうじゃない。そうじゃないのだ。

「俺たちは、俺たちは何のために戦ってんだよ、レオン！？」

問いかけた。声を殺しながらも、それでも、感情を叩き付けた。
そう――そうなのだ。自分たちが戦うのは、この国のため。だが、護には国という単位の大きさがわからない。だから必然、彼の理由は彼が知っている人たちのためとなる。
つまり、レオンたち仲間であり、スラムの人たち、子供たちであり――アリスという少女である。
その、戦う理由を見捨てろと、レオンは言うのだ。理性がその意味を理解していても、本能と感情がそれを認めない。
だがレオンは、護の感情に対し、同じ言葉をただ紡ぐ。

「この国のためだ。耐えろ、護」
「だから、俺は――……！」

――ダァンッッッ！！

銃声が轟いた。護とレオンは、弾かれたように外を見る。

そして――ただ、二人は、目を見開いた。

――一人の老婆が、その体を一人の軍人の手によって撃ち抜かれていた。

鮮血。その中で、老婆を撃ち抜いた軍人が、手にした拳銃を次なるターゲットへと向ける。その先にいるのは、目の前の出来事に対して呆然とし、動けないでいる小さな子供。

「まだ、見せしめが必要か？」

そんな声が聞こえた。そして。

――護の中で、何かが、振り切れた。

「悪ぃ、レオン」

呟きと共に、護は、走り出す。

「俺、耐えるとか、やっぱり――無理だ」

後はもう――止まらなかった。

止まれなかった。

◇　◇　◇

カルリーネ・シュトレンは、内心で息を吐いた。彼女の背後には、戦車四機を中心とした一個中隊が展開されている。後方には『切り札』も控えており、万全な状態だ。

そして、この万全な状態というものを構築したのは彼女だが、そこには一人の青年の助言がある。
ソラ・ヤナギ。
現在、とある案件のせいで統治軍のトップである将軍と統治軍の総督であるウィリアム・ロバートは首都を離れている。そのため、大尉という階級でありながらも十三代続くドイツの名門貴族シュトレン家の当主であるカルリーネが一時的に全権を預かっているわけだが、いくら彼女でも動くのには理由がいる。

（あの男は、その理由を全て揃えてきたか）

テロリスト――まあ、この状況下では《氷狼》のことだが、それがここにいるという確証はない。だが、可能性はある。そして同時に、スラムという厄介なものを消すという大義名分もあった。
汚い手だ、と、カルリーネは思う。外道だと。
だが、戦争というのはそういうもので、軍隊というものはそういうものだ。勝てば正義。負ければ悪。そしてこちらは勝者だ。理由付けなど後でいくらでもできる。
故にこそ。

「まだ、見せしめが必要か？」

拳銃の照準を、子供へと向けた。怯えた表情。この子供を撃ち、それでも出てこなかったのなら、まあ、それでもいい。結局潰すのだ。皆殺しにする気はないが、見せしめは必要である。
引き金に力を込める。自身が撃ち殺した老婆へと、一瞬、カルリーネは視線を向けた。しかし、何とも思わない。思う必要もない。
生きるべき人間と死ぬべき人間。自分と老婆。そして子供との間にあるのはそれだけなのだから。
そして。

――カルリーネは、引き金を絞った。

鮮血。同時に。

凄まじい轟音が――宙を裂いた。

「来たか、餓狼」

カルリーネが叫ぶと同時、一体の巨人が地面へと着地する。全長四メートル弱の蒼で全身を塗装されたその機体の姿を、カルリーネは報告書で知っている。

「――〈フェンリル〉！！」

かつての戦争で敗れ去りながら、今も尚、欧州へと牙を剥く氷原の餓狼。

その機体はまるで慟哭でもするかのように、夜空を見上げた。

◇　◇　◇

護は、目の前の状況に、ただただ、叫んでいた。

「――――――――――――――ッ！！」

救えたはずの命が救えなかった。血溜りを作る二つの死体を見て、ただただ、慟哭する。

「ふざけんな……ッ！！」

吠える。右手に持つのは、打ち払うための刃。左手に持つのは、守るための刃。
その両方を握る手に力を込めて。
護は――突撃する！！
『放て！！』
声が聞こえた。四台、横一列に並んだ戦車が、こちらを狙っている。護は咆哮するように叫ぶと、全力で〈フェンリル〉を突撃させた。
一閃、強力な一撃が戦車を一台、両断する。そのまま、返す刃でもう一台、粉砕する。
残る二台の砲門がこちらを向く。だが、照準を合わされる前に護は大きく跳躍した。
ズンッ、という凄まじい音を立て、空へと上がる護。そこまで大きな跳躍ではないが、戦車の上を取ることはできた。種類にもよるが、今ここに来ている戦車は砲門が真上には向かない型だ。ならば――
「おおっ！！」
咆哮。上空より剣を突き刺し、戦車を破壊。そのまま、もう一台の戦車も盾による打撃で打ち、吹き飛ばす。
戦車は封じた――そう思った護のコックピットから見える視界に、動きがあった。戦車を砕かれ、指揮官らしき女性指揮官――先程、二人を射殺した女性が無線で何やら連絡を取っているのだ。
そこで、護は改めて理解する。ここは首都であり、統治軍の本拠地だ。神将騎だって何機もあるだろうし、相応の装備もあるはずである。

マズいな、と、護は思った。神将騎同士の戦闘になれば、護には周囲を気にする余裕が消える。ここで神将騎の戦闘などをしたら、文字通りここが潰れる。
ならば、と、護は首都の中心地を睨む。ここから戦場を移動させなければ。

「〈フェンリル〉！！」

呼ぶと、まるで応じてくれるように力を溜め、〈フェンリル〉が地面を蹴り飛ばした。エネルギー残量を見る。原理は不明だが、神将騎は単純な時間経過でエネルギーの回復をする。現在はフルチャージとはいかないが、一時間近くは動ける程に回復はしていた。
そして、護は首都の中心部へと高速で移動する。少しすると、大きな広場に出た。周囲では一般人と思しき者たちが悲鳴を上げているが、そのほとんどは他国の人間だ。
小さな舌打ち。それと共に、どうするか、と護は思考を巡らせる。
――そこへ。

大質量の到着音が、響き渡った。
現れたのは、白銀騎士甲冑を纏ったような姿の神将騎。

ザザッ、と、〈フェンリル〉のコックピット内にノイズが走った。
〈フェンリル〉を含め、神将騎に装着されている通信機だ。相手は――レオン。

「何だ――」
『死ね』

簡潔な一言だった。だがその後、いや、とレオンは言葉を繋げた。
『俺が殺す。だから生きて戻ってこい。東だ。東へ向かえ』
「東？」
問いかけ。それに対し、ああ、とレオンが応じてきた。
『こんなことにならなければ言うつもりだったんだが、東には――
……――ッ、……、――――……』
「レオン？　おい、レオンッ！？」
通信が途切れる。……何れにせよ、方針は定まった。あのレオンが確証もない指示を飛ばすはずがない。自分は生きて東へと向かえばいい。
だが、その前に――
「……〈ワルキューレ〉」
目の前に現れた機体を見て、護は呟く。直接見たことはなかったが、アルビナとかいうレオンが頼りにしている情報屋からもらった情報で見た記憶がある。統治軍の主力の一機だ。
その〈ワルキューレ〉が、その背に背負った長槍を右手に持つと、大きく振り回した。洗練された動きだ。それだけで、操っている奏者の実力が高いことがわかる。
（俺と同じ、近接主体か）
腰のハードポイントに短銃が二丁、装備されているが、使う気配がない。つまりは、近接船が主体の機体なのだろう。

ならば、と、護は思う。
ここで〈ワルキューレ〉を砕き、東へと移動する。レオンたちのために時間を稼ぐことを考えれば、二十分近くは暴れなければならない。

行くぞ、と、護は呟き。
そして、戦闘が始まった。

こうして始まった長い長い戦いの日々は。
きっと、始まりから、間違っていたのだろう。

## 第三話　譲れないモノ（後書き）

というわけで最新話。
全力全開、大加速中でございます。

ソラ&リィラの会話はおそらく、前半戦では後々登場する変態と合わせて唯一の気を抜ける部分。助かりますね、本当に。

そして、序盤戦開幕。後二話分は明日、明後日にでも投稿します。

お付き合い頂けると幸いです。
感想お待ちしております。

ありがとうございました。

# 第四話　孤軍、望む未来

レオンは決断を迫られていた。戦闘が始まろうとしている。馬鹿が戦車こそ捻じ伏せたが、歩兵は残っているのだ。今は中心街へ向かった〈フェンリル〉の対応に追われているが、それに一定の決着が着き次第、矛先はこちらを向くだろう。

どうする、と、レオンは疑問する。すでに逃げ惑うスラムの人々は、家屋の陰に隠れたり、スラムの奥へと移動している。そして同時に、その視線の全てがこちらを向いている。

それは希望であり、

期待であり、

落胆であり、

憤怒であり、

信用でも――ある。

ここにいる者たちは、皆、自分たちに期待してくれている。二年もの間、ゲリラ戦でこそあるがそれなりの結果を残し、戦い続けてきた自分たちにだ。

だが、レオンは答えを口にできない。どうすればいいのだろう、という問いかけだけが延々と自分の中で紡がれているだけで、どうにもならない。

立ち竦むレオン。そこで彼は、ああ、と、初めて理解した。

自分は、こんなにも――これほどまでに、弱かったのかと。

護は、おそらく感情で動いた。目の前で失われることが許せなくて、ただただ、衝動のままに地下で整備中だった〈フェンリル〉を持ち出し、動いた。

最悪の一手だとレオンは思う。自分ならば絶対に選ばない。今の二人を犠牲に、未来の千人を救えると、そう判断するだろうからだ。

だから、自分にはあんなことができない。

「くそっ……」

呟きが漏れた。判断は間違っていない。あの馬鹿さえ動かなければ、ここまでことが大きくなることはなかったのだ。

それでも、思うのだ。

あの時、どうして、どうして自分は。

あの背中を、何も言わずに見送ったのだろうかと。

「くそっ……！」

今考えても仕方がないことだ。だが、考えてしまう。

逃げたい。だが、逃げられない。そんな鬩ぎ合いで押し潰されそうになる。この背中には、大きなものが乗っているのだ。背負っているのだ。それを、自分は――

「――らしくないじゃありませんか、レオンさん」

不意に聞こえてきた声。レオンは弾かれたように視線を上げた。

その先にいたのは、このスラムを取りまとめている老婆だ。

マーサさん、と、レオンは呟いた。女性は、ええ、と頷く。

「何をそんなに思い詰めておられるのですか？」

「……すみません」

レオンは再び俯き、ただただ、感情だけを込めて頭を下げた。マーサを含め、このスラムには恩をもらってばかりだったというのに、

こんな形で仇を返すことになるとは。
だが、マーサは、いいんですよ、と首を左右に振る。
「いずれこうなるとは、思っておりましたとも。……それに、正直、嬉しかったのもありますからねぇ」
言って、マーサは振り返った。その視線の先では、殺された二人を布で包み、運んでいる姿がある。
「護さん……あの子が飛び出してくれた時、ああ、良かった、とそう思ったのですよ」
「……良かった？」
「ええ、ええ。あなたたちは、私たちと一緒に憤り、抗おうとしてくれた……その事実が、嬉しかったのです。私たちは、ただ服従するだけの奴隷ではないと」
言って、マーサはけれど、と言葉を続けた。
「ここでの生活も、終わりかもしれませんねぇ」
「――すみません！！　何があってもここから無事に退避していただきます！！」
「お顔を上げてくださいな。……それに、そのお話ですけれど、私はここに残ろうと思います」
えっ、というレオンの疑問。その視線の先で、マーサが苦笑した。
「私だけではありません。無論、あなたたちに連れて行って欲しい者たちも、それこそ子供たちを中心に大勢おりますが……それでも、ここが私の故郷ですから」

彼女は、言う。

「戦争で夫を亡くし、子を亡くし……多くのものを得て、失ってきた人生でした。しかし、私に後悔はありませんよ、レオンさん。あなたたちという希望を見て、託すことができるだけで。――これ以上の幸いはないではありませんか？」

「しかし」

「ここが私の生まれた場所で、私はここで死んでいくのですよ、レオンさん。……すでに、こういう時を想定して準備はしてありました」

ガチャリ、と、不意に背後から無機質な音が聞こえてきた。振り返ると、そこには。

「何故……？」

いたのは、銃を手にした老人たちや、女性だ。どういうことだ、というレオンの呟きに、マーサが応じる。

「逃げる意志ある者は、すでに地下へと向かっているはずです。以前より話しておりました。銃など、このご時世ならばいくらでも手に入りますもの。後は、抗うかどうかの意志だけ。結論はこれです。……生きる意志ある者たちと、子供たちを連れて生きてください、レオンさん」

マーサの言葉と同時、レオンは銃を構えた者たち――戦うことなど、できはしない者たちに背を叩かれ、肩を叩かれた。そして、彼らは言う。

「思い詰めんな、坊主。坊主たちが生きてりゃ、まだ希望はあるん

だ」
「しっかりしなさいな。死にそうな顔してないで」
「ほら、顔上げて」
笑いながら言う彼らは、すでに臨戦態勢に入っている。しかし、所詮は素人だ。勝てるわけがない。相手は軍隊なのだ。
今でこそ混乱しているが、すぐに立て直してくるだろう。
そこへ。
「ねぇ、レオンさん」
マーサは、遠くを見つめながら、言葉を紡いだ。
「私たちは、辛い役目を押し付けます。生きて戦えなど、散る者の押し付けにしか過ぎません。多くのものを背負わせます。それでも……受け取って、くれますか？」
言葉に対し、レオンは、吐息を零した。
俺は、と、小さく呟く。言葉が続かない。
どうすべきなのだろうと、ずっと同じ疑問が延々と頭の中を回っている。答えは出ない。
――そして、事態は更なる状況を突きつけてくる。
『――レオン！！』
通信から響いたのは、《氷狼》における唯一の女性、レベッカ・アーノルドだ。その声は非常に切羽詰まっている。
『レイドさんが！！』
「どうした、レベッカ――」

『うだうだ悩むなよ、レオン』

無線から声が届いた。この声はレイドさんか、とレオンが思った瞬間。

――レオンたちが隠れ家にしていた家屋が、轟音と共に吹き飛んだ。

現れたのは、一台の戦車だった。地下で護の〈フェンリル〉と共に移動手段として用い、同時に切り札として用意しておいた一台。

動かしているのはレイドだろう。彼は、一発、敵陣へと砲撃を行いながら言葉を紡いだ。

『ここは俺と覚悟決めた奴で引き受ける！　お前は退け！　護の馬鹿は自力で何とかする！　お前は嬢ちゃんと一緒にここから逃げろ！』

「ですが――」

『腹ァ括れ！！』

一喝が飛んできた。レイドが乗る戦車は決して小さくはないキャタピラの轟音を響かせているが、レイドはそれに負けない声量で言葉を紡いでいる。

『ここが転機だ！！　いいか！？　俺は過去の遺物だ！！　敗戦国の亡霊だ！！　ここで死んでもそれは二年前に死ぬべきだったのがここで死ぬだけだ！！　あの馬鹿に生かされて、その命がようやく終わるだけだ！！

――だがな、お前らは違うんだよガキ共！！』

叫び。敵の部隊は戦車の出現に対し、散開して相応の対応を取ろうとしている。それに対し、銃を持つスラムの住民たちもまた不慣

れな戦いに赴こうと遮蔽物を盾に動き始める。
その中で――レオンだけが、動けない。
『お前らは希望だ！！　生きろ！！　泥水啜って土食んででもだ！！　俺みたいな亡霊にできるのは、未来にお前らを繋ぐことぐらいなんだよ！！』
そして、通信が切られる。レオンは、通信の切られた無線を呆然と見つめていた。
その正面ではマーサがさて、と呟くと、懐から拳銃を取り出し、言葉を紡ぐ。
「私も行きます。――お達者で」
そして、彼女は一礼すると戦場へと向かっていった。
――待ってくれとは、言えなかった。
ただ茫然とその背を見送り、レオンは、くそっ、と小さく吐息を零す。そのまま、彼は逃げるように吹き飛んだ家屋から地下へと走り込んだ。
薄暗い空間。その中では電灯を持ったレベッカと、彼女の後ろにこちらを見つめる無数の瞳があった。
そのほとんどは、子供や、その親。もしくは若い女性だ。男は収容所送りにされているか強制労働に従事しているのだから、いるはずがない。
一都市のスラム街の一角。そこの住民全員ではないが、ほとんどが集まっているのだ。単位は数百人規模である。
これが今のシベリアなのだと、レオンは思った。
これを、背負っていくのだと。

「……レオン」

窺うように、レベッカがこちらを見た。レオンは努めて平静を装い、言葉を紡ぐ。

「行こう。……ここから通じる場所に、統治軍の支配が緩い村がある。そこを目指そう」

レベッカに先導を任せ、レオンは一つの装置を手に取る。万一のため、地下へと通じる道を壊すために設置していた爆弾を起動する装置だ。

それを起動し、レオンは、無線を取り出した。

轟音が響く。道を閉じれば、レイドやマーサたちはもう戻って来れない。レオンは無線を操作し、護へと繋いだ。

その中で、思う。

――自分は、何をしているのだろうかと。

◇　◇　◇

戦車の中で、レイドは笑みを浮かべていた。飛び出した馬鹿も、躊躇った馬鹿も、止めようとした馬鹿も、本当に、本当に愛すべき仲間だ。

だった、などと過去形にはしない。何故なら、自分は死にに行くのではないからだ。

レオンにはああ言ったが、これは生きるための戦いだ。この国はまだ死んでいないと。生きていけると。そう示すための戦いだ。

――あの馬鹿はよくやってくれたぜ……！！

おそらく、あいつは馬鹿だから考えての行動ではないだろう。単純で、馬鹿で、不器用だから。しかし、真っ直ぐだ。正しいこと、正しくないこと。そこに真正面からぶつかっていく。

だから、馬鹿が――護が動いた時に、腹を括った。

レオンが動かないのはわかっていた。あれは頭がよく回る。動けるわけがない。

だが、護は動いた。未来よりも、今の命を救おうとした。

どちらが正しいとか、間違っているとか、そういう話ではない。どちらも正しく、同時に間違っているのだから。

だが、良かったと、砲撃の引き金を引きながらレイドは思う。

ここで動かなければ、きっと、もうこの国は終わっていた。

殺されることに抗うことさえできずに、潰されていただろう。

しかし――そうはならなかった。一人の馬鹿が、抗った。

そして今、共に抗おうとする者たちがいる。

「ああ、そうだよなぁ……！！」

向こうが応戦準備を始めているのに対、し戦車の砲撃と共に行う突撃によって機先を制していく。

弾には限りがある。だが、出し惜しみをする必要はない。

「俺たちは、生きに行くんだよ……！！」

未来へ繋ぐために。

死ぬことによって繋ぐのではない。

生き抜いた結果として、未来のために何かを繋ぐのだ。

だから。
だからこそ――……！！
「俺は、俺たちは！！　まだ――！！」
砲撃。狙い違わず、歩兵部隊を穿とうとしていたその一撃は。
――突如現れた一騎の？神将騎？が、防いでいた。
灰色の機体。装飾のようなものは少しもなく、下半身はスカートのような装甲に覆われているが、上半身は必要最低限のフレームしか装備されていない機体。
ゆらり、と、揺らめくようにその神将騎が動いた。まるで幽鬼のような挙動をするそれに、レイドは覚えがある。
「聖教イタリア宗主国の、《生ける屍（リビング・デッド）》！！」
応じるように、幽鬼が動く。
どんな戦場からも必ず生還したという不気味な存在。あの『アルツフェムの虐殺』さえも生き残ったというのだから、その不気味さは度が過ぎている。
レイドは、大きく息を吐いた。そして、前を見る。
――さあ、行こうか。
生きるために。
そして――……
◇　◇　◇

「さて、？――いや、ヒスイ。往きたまえ」

幽鬼のような不気味な雰囲気を発する神将騎――名を、〈クラウン〉。

それを眺めながら、白衣を纏う仮面の男が笑った。

仮面には口が描かれていない。それもあってか、男の笑い声はどこまでも不気味だ。

深い緑色の髪を震わせ、くっく、と笑みを零す。

「嗚呼、嗚呼、いいねぇ……！！　実にいい……ッ！！」

彼の周囲にいる者たちは、みな、一様に彼を遠巻きに見ている。引いている、という表現が何よりも似合うが、それを彼が気にする様子はない。

「平和など、平穏など！！　無価値だよそんなものは！！　見給えよ！！　さあどうかね！？　これが戦いだよ諸君！！――ははは っ！！　実にいい光景だ！！」

「……大変いい空気吸ってるとこすいませんが、ドクター？」

腹を抱えて笑いだす男――ドクターに、背後から声がかけられた。そこにいたのは、青がかかった黒髪の軍人――ソラ・ヤナギだ。

「おお、久し振りではないかね？」

「ですねー。……サインもらっていいですか、ドクター。ウチの部隊への所属手続するんで。あなたとヒスイの」

「ああ、構わんよ」

頷き、ドクターは差し出された書類に名を書く。ドクター・マッド……名前じゃないだろこれ、と誰もがツッコむような内容だが、ソラは頷いた。

「ありがとうございます、ドクター」
「ふっ、丁寧な言葉を使う必要はないよ、キミならばね。――アルツフェム以来かな？」
「……色々ありましたからね、俺も。言葉遣いはその一環です」
「苦労しているようだ。実にいいことだね」
「喜んでません？」
「忘れたのかね？　私はキミのことを気に入っているが、嫌っていると言ったはずだが？」
「そういや、俺もアンタが嫌いでしたね」
「それでいいのだよ、お互いにね」

男二人が笑う。その中で、さて、とソラは背伸びをした。

「ドクター、俺はこれから外縁部に行きますけど、どうします？」
「外縁部？　この状況で外を見てどうするのかね？」
「俺の予測が正しければ、面白いものが見れますよ。――餓狼と赤獅子。強いのはどちらでしょう？」

言葉に、ドクターは一度俯き。

「くくっ……」

笑みを、漏らした。

「くくっ、ははははははははははっ！！　そうか、そうかそうか！！　？彼？が来ているのだね！？　いいね、実にいい！！

私も連れて行ってくれるかね！？」
「むしろ誘いに来たんですよ、ドクター」
「いいねぇ、やはりいい。この二年、退屈な研究所にいたが……やはり、最前線は良いものだ」
「また見れますよ、地獄が」
「今度は勝者だといいがねぇ」

ドクターの言葉に、そうですね、とソラは頷いた。
直後。
――〈クラウン〉が、敵側の戦車を打ち砕いた。

◇　◇　◇

火花が散る。眼前で、互いに殺すための武器をぶつけ合う。
轟音を響かせ、槍と剣が幾度となく火花を散らす。その最中、護は舌打ちを零した。

――コイツ……場慣れしてやがる……！

神将騎とは現代最強の兵器であり、その力は強大で絶対的である。だが、神将騎とは古代遺産なのだ。今の技術で神将騎を新たに製造することは、研究こそされているが実現は出来ていない。
手足――こちらもまだ未知の部分が多いが、基部さえ無事なら手足の復元は可能というが、中心部を破壊されれば直すことは不可能となる。ここが、神将騎最大の弱点である。
代えが利かない。
故に、多くの指揮官は神将騎の投入を『必勝の状況下』でしか行わない。相手が神将騎を出してきた際は出撃も止む無しとなるのだ

が、多くの場合、『神将騎を失わない』というのが前提となる。故に、神将騎乗りたる?奏者?は存外、慣れていない者が多い。
ほとんどの奏者は、文字通り命を削るギリギリの戦場や、不利な状況というものに慣れていない。基本的に優位な状態で戦場に出るのが常だからだ。
だが、今。目の前にいる神将騎――〈ワルキューレ〉は。

――厄介だな、コイツ……！

護は盾で槍を弾き、懐に入る。瞬間、〈ワルキューレ〉は自身の背部に槍を動かし、両脇で挟み込むと、機体を横に大きく回転させた。
護はその場を飛び退く。これだ。機体のスペック差もある。だが、動きが洗練されていることが大きい。一瞬でこちらの動きに対応してくる。
今まで、護は死ぬか生きるかのギリギリで戦ってきた。故にこそ、それが他の奏者との差になっていた。
勝てる状況で、圧倒的な力を振るってきた者と、
不利な状況で、死線を潜り抜けてきた者。
その差で、戦ってきた。しかし。こいつは、この敵は。

「俺と同じか……！！」

前から、〈ワルキューレ〉についてはレオンから聞いていた。記録に残すべき活躍をしていながら、何故か公的な記録が残らない存在。レオンは警戒しろと言っていたが、こういうことか。
相手に有利な状況であることに間違いはない。だが、今の状況は局地的には一対一。その中で、こうも競り合うことになるとは。
強い、と、護は思った。今までとは違うと。
――故に。

「……」

大きく息を吸う。そして。

護は、大きく足を踏み込んだ。

ズンッ、という凄まじい音が響き、〈フェンリル〉が地面を蹴り飛ばした。時間がない。一撃離脱を選ぶ。

行うは刺突。狙うは首元。神将騎は人と構造が似ている。首を弾けば機能が一時的に止まる。その後、コックピットを潰せば終わりだ。

コックピットがある腹部は装甲が基本的に異様に硬い。一撃では潰せない故の判断だ。

動く。刺突。

〈ワルキューレ〉が応じる動きを見せた。槍を構え、防ぐ勢い。

上等、と、護は前を見た。突き出す。弾丸のような一撃。それは正確に頭部へと到達する。

僅かな感触が手に広がった。そのまま打ち抜け、と思った瞬間、しかし。

――下から、刃を――？

槍の柄によって、腕をかち上げられた。僅かにずれた刺突の軌道は、〈ワルキューレ〉の頭部を僅かに掠めるだけだ。

凄まじい腕である。この速度で、僅かにずらすだけにかち上げるのを抑えた。あまりに大きく弾き上げると、こちらに仕切り直しの動作を生む余裕ができる。

マズい、と、護は思った。それと同時、眼前にあるものが迫ってくる。

足だ。

「ぐうっ！？」

機体が大きく揺れ、護は奥歯を噛み締める。蹴り上げられたことで機体が浮き、仰け反った状態になる。そこへ。

――ヒュボッ！！

本気でそんな音が聞こえた。凄まじい速度での槍による刺突。それは正確に〈フェンリル〉の左腕を狙い打つ。

「……ッ！！」

咄嗟に盾を出したが、貫かれ、肩をやられた。目の前の画面にいくつもの『損傷』の文字が浮かぶ。このシステムはどうなっているのだろう、とか思うが、それは今考えるべきではない。

左腕を抜かれた。護は舌打ちを零し、同時に即座に左腕をパージした。おそらく持ち帰ればそれなり修理もできたのだろうが、槍で貫かれたままの左腕など戦場では枷にしかならない。

その判断が意外だったのか、〈ワルキューレ〉は一瞬、動きを止めた。パージした左腕に噛んだ状態の槍が邪魔で、向こうの動きが遅れる。

ここだ、と、護は大きく背後へと飛んだ。この状況下で戦っても、こちらに勝ち目はない。左腕を奪われた状態では、〈ワルキューレ〉の槍術に抗えない。

それに、護は視界の端に理解していた。こちらに人員が集まり始めている、と。

ならば、陽動も切り上げねばならない。機動時間を考えても、ここがラインだ。故に。

「……！！」

護は一切の躊躇もなく、〈ワルキューレ〉に背を向けて〈フェンリル〉を走らせた。背後、〈ワルキューレ〉がこちらに対応しようとする気配を感じる。しかし、拳銃程度ならば大丈夫だ。
シベリア連邦の首都モスクワは、戦争時代の名残として城壁のような外壁で囲まれている。それを乗り越え、東へ向かう。
外壁が近付く。飛び上がる。瞬間。
果たして、〈ワルキューレ〉の追撃は。

――ズンッッッ！！

投槍だった。空中にいる〈フェンリル〉の左側。腕があった場所――今は何もない場所に、槍が深々と突き刺さっていた。
それに対し、背中に冷たい汗を感じながら、護は外縁部を駆け上がる。
二年前の戦争で徴兵された護は、この外縁部で見張りをしていた。その時、襲撃を受け、アリスと離れることになる。
チラリと、護は背後を見た。
――アリス。
ここにいるはずの彼女のことを想う。そして、一度目を閉じ。

「必ず、俺は――！」

誓いを胸に、外縁部より飛び降りた。
ズンッ、という轟音。着地で脚に多少のダメージが入ったが、まあ、問題ない。このまま全速力で東へと駆け抜ける。まずは向こうの追っ手を捲かなければ。
そう、思った時。

「――――」

眼前、東側。モスクワから見れば、標高二千メートルを超える雪山――護は、ここに紛れ込んで姿を晦ましそうとしていた――の麓に、一つの影があった。

紅。

一言、ただただそう表現できる威容だった。

そして、護は。

自身の血が沸き立つような感覚を覚える。

「テメェは……！！」

紅蓮の、獅子を象ったような姿をした神将騎。

覚えがある。伝聞としてではなく、自分自身で目撃し、体験したのだ。

敗北したあの日、こいつに外壁を壊され、アリスと離れることになった。こいつの突撃を起点とし、シベリア連邦は首都を制圧され、敗戦した。

その者の名と、神将騎は、おそらく前大戦を経験した者なら知らない者はいない。

紅蓮の？神将騎？――〈ブラッディペイン〉。

操る奏者の名は、《赤獅子》朱里・アスリエル。

聖教イタリア宗主国最強の神将騎と、その奏者。

畳み掛けるような事態の進行。最早絶望ともいえる相手を前に。

護は、吠える。

「そこをどけ……！！　邪魔をするなら、叩き潰してでも押し通る

！！」

◇　◇　◇

外縁部より戦闘が始まったのを見届けながら、二人の男が言葉を交わしていた。ドクターがタバコに火を点け、紫煙を吐き出すと、彼は隣の男――ソラへと一本、タバコを差し出す。

「吸うかね？」
「自分のあるんで」

言って、ソラは煙草を咥えると紫煙を吐き出した。そうしながら、さて、と呟く。

「ドクターから見て、どうです？」
「――楽しくて仕方がないよ、本当に。あの青い機体……確か、〈フェンリル〉だったかな？　あの程度のスペックで、よくもまああそこまで動けるものだ」
「そんなに酷いのですか？」
「いいところ、中の下だろうねぇ。〈クラウン〉よりは遥かにマシだが、『名持ち』の〈ワルキューレ〉や〈ブラッディペイン〉とは天と地だ。――正直、〈ワルキューレ〉なら狩れたのではないかね？」

問いかけ。それに対し、ソラは首を左右に振った。外縁部より、二機の戦闘を見ながら言葉を紡ぐ。

「それは相手をナメ過ぎですよ、ドクター。相手はあれでも二年間、

こっちに抗ってきた存在です。つい先日、〈ゴゥレム〉駆ってたラットさんもやられましたし」
「ああ、そういえばそんな報告があったねぇ」
「どうでもいいですけどね」
「全くだ。男にかける情けなど存在しない」
「道理です。……とにかく、撃墜するのは難しいだろうと最初から判断していました。相手が逃げの一手を打てば、流石に追撃は難しいと」

ソラが振り返る。その視線の先には、〈ワルキューレ〉の撤退準備と、それを手伝う隊員の姿。
……俺、必要ないな。
働く部下たちを見ながらそんなことを思うが、まあ、所詮は無能なので問題なし。仕事はできなくて当然だ。
コホン、と、一つ咳払い。

「まあ、そういうわけで、〈ワルキューレ〉には負傷させることを主目的にさせました。撃墜もできればしろとは言いましたが」
「ふむ、最後の投擲などは見事だったね。実に惜しい。刺さっていれば見事だったろうに」
「マジの磔刑ですからね。……後、俺たちの部隊は、その、あんまり活躍しちゃならんのですよ、ドクター」
「ああ、聞いているよ。確か、『懲罰部隊』と呼ばれているそうだね？」
「ええ。……実際は、戦争の時に現地徴兵した中で多少問題がある奴を集めただけなんですけどね。馬鹿ですけど、いい奴らです」
「いいことを聞いた。不安がなくなるね。そういう場所の方が気楽でいい」
「それは重畳」

言って、ソラは笑った。ドクターはタバコを吸うために口の部分だけ出していた仮面を着け直すと、さて、と言葉を紡ぐ。

「後で〈ワルキューレ〉を弄らせてもらうよ？　ふふっ、ここから見るだけでも実に美しいフォルムだ……！　嗚呼、嗚呼、楽しみだねぇ……！」

「トリップしないでくださいドクター。で、どう見ます？」

「ふむ。どう見るも何も」

眼下。山を背後にした〈フェンリル〉から少し離れた位置に、〈ブラッディペイン〉が立っている。それを見て、ドクター、と呼ばれる男は呟いた。

「……ここで詰みだよ。『獅子咆哮（ヴォーチェ・レオーネ）』――固有武装か。？神将騎？とはやはり、斯くも面白いものだねぇ」

ドクターの笑みがこぼれると同時。

――大気が割れるような振動が、空を襲った。

◇　◇　◇

「あ……かっ……！？」

何が起こったのか、護は理解できなかった。こちらは左腕を奪われた状態だ。故に隙を見て、逃走しようとした。だが、相手の動きに翻弄され、気が付けば。

――音が……！？

何も聞こえず、視界も揺れている。何が起こったのか、モニターには『損傷』と『危険』のフレームが大量に浮かび、何をどうしたらいいのかもわからない状態だ。

直後、機体が大きな衝撃を受けた。

かはっ、と、護は息を吐き出す。だが、それが気付けのショックとなったのか、視界が未だに不安定ではあるがはっきりとしてきた。音も――大丈夫だ。

だが、護はそこで悟る。

「動かねぇ……！？」

相棒が――〈フェンリル〉が動かない。おそらく山に激突した衝撃と、正体不明の攻撃による一撃のせいだ。モニターが『損傷』と『危険』という文字によって埋め尽くされている中、くそっ、と護は呟く。

眼前、敵がいる。無傷だ。こちらの刃は、少しも届かなかった。

戦闘時間は、数分、いや、一分かそこらだっただろう。

ちくしょう、と、護は呟いた。

今の境遇の全てが始まったあの日。目にした、紅蓮の敵。それが今、目の前にいるというのに何もできない。

「ちくしょう……」

敵が――〈ブラッディペイン〉が、こちらに迫ってくる。

「動けよ……！」

ガチャガチャと、機体を動かそうとする。しかし、動かない。

「動いてくれ……！」

こんなところで終わるのか。こんな、こんなところで。

ふざけるな、ふざけるなよ。

俺はまだ、何も――！！

「動けってんだよ！！」

――その声が、何かに届いたのか。

直後――轟音と共に、〈フェンリル〉の視界が覆われた。

◇　◇　◇

暗い研究室で、一人の女性が大きく背伸びをした。眼鏡をかけた女性だ。

その女性は冬国にいるというのに短いスカートをはき、白衣を着ているだけで厚着はしていない。

「ふむ」

不意に、女性は首を傾げた。そうしてから立ち上がり、笑みを浮かべる。

「雪崩とは、外で何かあったのでしょうか？……どう思います？」

「さて、ね」

問いに応じるのは、包帯を腕に巻いた女性だ。――アルビナ。レ

オンも情報をもらうために協力してもらっていた女性だ。
もう一人、白衣を着た女性は苦笑を零す。

「つれませんねぇ、あなた」
「厄介事は嫌いだね」
「フフッ、いい女とは、厄介事を楽しむものですよ？」
「アタシは別に、いい女じゃなくてもいいさね」
「あらあら、勿体ない」

笑う女性の視線の先、アルビナは息を吐くと、アタシはここで帰るさね、と言葉を紡いだ。

「さっき言ったように、首都で動きがあった。おそらくだけど、何かが動くよ、先生」
「でしょうね。二年、各地を放浪しましたが……この子を託せる相手というのも、なかなかいないものですね」

言って、先生と呼ばれた女性は一体の巨人を見上げた。
まるで、鎧武者――最早滅びた、極東のサムライのような出立ちをした神将騎。

「あなたの新しい主は、現れてくれるのでしょうかね？」

その機体の、名は。

「――〈毘沙門天〉」

## 第四話　孤軍、望む未来（後書き）

というわけで混迷を極めてきました第四話。
序盤戦の首都攻防戦です。

さてさて、今回登場しましたヒスイとドクター・マッドは舞台裏の黒衣先生から頂いたキャラクターです。といってもドクターについては名前だけで他は元々予定していたキャラ付けなのですが。
いやはや、書いていて彼は実に楽しいですねｗｗ
人生を一番楽しんでる雰囲気ｗｗ

そしてもう一人。ＥＵの主要国であり、ソラの祖国である聖教イタリア宗主国最強の奏者、朱里・アスリエルは黒雨蓮先生に頂きました。

次回で首都攻防戦は終わりを迎え、ようやく序盤戦終了です。お付き合い頂けると何よりです。

では、感想など頂けると物凄く喜びます。今のところ、毎回毎回によによしながら喜んでたり？

ではでは、ありがとうございました。

……次回よーやく、天音先生登場かな？

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9950z/

英雄譚―名も亡き墓標―

2012年1月4日10時47分発行